

報告書

2025
第20回 森のようちえん 全国交流フォーラム in 青森

いのちの根を見つめなおす
森の仲間たちとの3日間 学び・体験語りあい

第20回 森のようちえん全国交流フォーラムin青森
ご協賛企業・団体

特別協賛



一般財団法人セブソーイレブン記念財団

協賛

mont-bell

株式会社モンベル



ニューウェルブランズ・ジャパン合同会社
コールマン事業部

株式会社青森山田サービス

後援

株式会社サンデー

青森市 青森市教育委員会 青森県私立幼稚園連合会
青森県保育連合会 日本保育協会青森県支部
青森県保育協会 全国認定こども園協会青森県支部

オール東北の仲間とともに開催

主催  森のようちえん全国交流フォーラムin青森実行委員会

共催  NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟

 青森大学

開催日：2025年11月1日(土)・2日(日)・3日(月・祝)

会場：青森大学





2025年 森のようちえん全国交流フォーラムin青森

いのちの根を見つめなおす3日間

報告書

CONTENTS

● ご挨拶	2
● スケジュール	3
● 開会式	5
● 基調講演	6
● 記念シンポジウム 第一部	9
● 情報交換会/交流会 ①	13
● 誌上対談	14
● 分科会 セッション1	17
● 分科会 セッション2	23
● 分科会 セッション3	29
● フリー分科会	35
● 森林環境教育 自然保育の実践発表	37
● 情報交換会/交流会 ②	38
● 記念シンポジウム 第二部	39
● 特別講演	41
● 外遊び・託児	43
● 閉会式	44
● 協賛企業・後援企業	45
● スタッフ名簿	46



実行委員長あいさつ



青森フォーラムをふりかえって

第20回森のようちえん全国交流フォーラム in 青森

実行委員長 佐々木豊志（青森大学）



20年前に「自然体験と子育て・幼児教育を考える」をテーマとして始まった「森のようちえん全国交流フォーラム」は、回を重ねて今年で20年目の節目となりました。この節目の大会は、県名に「森」がつく唯一の県である青森で開催し、「森」という文字を「木・水・土」という文字で表現した徳村彰氏の「森には何ひとつ否定されるものはない」、「森のように全ての命は繋がりにある」という想いを含め「いのちの根を見つめなおす3日間」をテーマにスタートしました。

初日の基調講演はいまここから紡ぐ「センス・オブ・ワンダー」～「きてよかったね」と言える世界へ～と題し森田氏が、こどもの瞬間の体験が、未来の学びや生き方につながることを示唆されました。

2日目は、3つのテーマで全37分科会が開かれ、それぞれの地域や現場での実践などが紹介され、子どもと自然の関わり、保育のあり方について活発な対話が生まれました。

最終日の特別講演では、「エラー＆ラン～正解のない世界を生き抜くには」と題し、岡田氏に、これからの不確実な社会では、正解があらかじめ用意されている世界でなく、自然の中での遊びや体験は、子どもが試行錯誤しながら学ぶエラー＆ランを体現する場であり、生き抜くために社会・大人が子どもを支えていくことの重要性を示唆していただきました。

このフォーラムは参加者同士の交流も大きなテーマで、今回の実行委員はオール東北6県のメンバーが趣向を凝らしてお迎えいたしました。

子どもたちの育ちの原点に立ち返り、人と自然、人と人、そして命のつながりを見つめ直すという願いが込められていました。

この青森での出会いと学びがこれからの実践へとつながり、そしてさらに次回開催される長野県大会へと大きな流れとなっていくことを願っています。

最後に本フォーラムの開催にあたり、回を重ねて特別協賛をいただいた

一般財団法人セブンイレブン記念財団様

協賛・ご協力いただいた、株式会社モンベル様

ニューウエルブラウنز・ジャパン合同会社コールマン事業部様

株式会社青森山田サービス様

株式会社サンデー様

ご協力をいただいた全ての関係各位に改めて深く御礼申し上げます。

そして、全国から青森にご参集いただいた皆様

開催運営にご尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

11/1 (土)

11:00 受付
12:10 開会式
12:45-14:45
基調講演 森田真生 氏
15:15-16:30 記念シンポジウム1
17:00-19:00 情報交換会1

Day1

11/2 (日)

9:00-10:30 分科会(session1)
11:00-12:30 分科会(session2)
昼食
13:30-15:30 分科会(session3)
16:00-17:00 秋田県による事例発表
18:30-21:00 情報交換会2

Day2

11/3 (月)

7:30-8:30 フリー分科会
9:00-10:00 記念シンポジウム2
10:30-12:00
特別講演 岡田武史 氏
12:00-12:30 閉会式

Day3

Keynote Speech 11/1 (土) 12:45-14:45

森田真生 氏

いまここから紡ぐ「センス・オブ・ワンダー」
～「きてよかったね」と言える世界へ～

● 森田真生 (もりた・まお)

独立研究者。京都で研究・執筆のかたわら、国内外で「数学の演奏会」などライブ活動を行っている。デビュー作『数学する身体』(新潮社)で第15回小林秀雄賞を受賞。他の著書に『数学の贈り物』(ミシマ社)、『僕たちはどう生きるか』(集英社)、『計算する生命』(新潮社、第10回河合隼雄学芸賞)、『偶然の散歩』(ミシマ社)、『かずをはぐくむ』(福音館書店)、絵本『アリになった数学者』(絵・脇阪克二／福音館書店) 訳書にレイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』(筑摩書房)がある。



Special Lecture 11/3 (月) 10:30-12:00

特別講演 岡田武史 氏

エラー&ラン 正解のない世界を生き抜くには

● 岡田武史 (おかだ・たけし)

早稲田大学政治経済学部卒業後、古河電気工業株式会社に入社。2度のW杯を指揮を執り南アフリカ大会では チームをベスト16に導びく。Jリーグや中国リーグでも監督を歴任した。現在はFC今治の運営会社、株式会社今治、夢スポーツの代表取締役会長として「次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを大切にする社会づくりに貢献する」を企業理念として、サッカー事業だけでなく環境教育事業や学校法人の運営など様々な分野で活動している。



Commemorative Symposium 11/1 (土) 15:15-16:30 11/3 (月) 9:00-10:00

記念シンポジウム 第一部 森のようちえんの【現在地】 第二部 わたしの森のようちえん宣言

記念シンポジウムは、20年の歩みをふりかえりながら森のようちえんの【現在地】を見つめる第一部と、3日間で得た学びや思いをこれからの実践へとつなげる第二部「わたしの森のようちえん宣言」の二部構成で行われました。これまでをたどり、今を確かめ、そして5年先に向けた一歩をそれぞれの言葉で描きます。全国で積み重ねられてきた実践の声に耳を傾けながら、森のようちえんのこれまでとこれからをあらためて考える時間となりました。

登壇者(第一部)
内田 幸一 氏NPO法人森のようちえん
全国ネットワーク連盟 名誉理事長登壇者(第二部)
佐々木 豊志 氏第20回森のようちえん
全国交流フォーラムin青森 実行委員長登壇者(第二部)
小林 成親 氏NPO法人森のようちえん
全国ネットワーク連盟 理事長

11月2日(日)
9:00~10:30

※法人格略称・敬称略

“いいことしているのに 選ばれない”を変える 教育現場のための伝わる 力と仕組みの話 ふたき草 伊藤俊輔	子どもと自然の未来 を守る!全国指導者のための Leave No Trace実践講座 社会教育協会ひの 社会教育センター 井上恵理 LNTJ 岡村泰斗	馬との共生が保育に もたらすもの—森のようちえん が動物に惹かれる理由を 解きほぐす 陽だまり 井上亘 三陸駒合 黍原豊	廃園公立園の民営化 再生と自然保育 ネイチャーセンター 内田幸一	「森のようちえん」の 次の学び場「とさ自由学校」 での学びとは? 日吉学園とさ自由学校 浦林遼	VUCAの時代の ヒントはウェルビーイングな 自然保育にある 森のようちえんウィズ・ナチュラ 岡本麻友子
30年自然保育と関わり 学んだこと、 今後大事にしたいこと 森のたんけんたい 小林直美	スライドショー 森からのまなざし ぐうたら村 小西貴士	わらべうた遊びと 子どもの育ち 奥州わらべうた遊びの会 郷右近博美	100年先を見つめる保育 園プロジェクト〜地域との つながりからはじめよう〜 もあなキッズ自然楽校 関山隆一 Akitaコードモの森 小玉朋子	組織論から考える 森のようちえんの安全管理 札幌大谷大学短期大学部 田中住幸	森のようちえんとは 森のようちえん 全国ネットワーク連盟 中能孝則

11:00~12:30

※法人格略称・敬称略

日々の中に“冒険”がある! 〜子どもの力を信じるまなざし と、冒険教育からのヒント〜 日本アウトワード バウンド協会 長野校 梶谷耕一	生命との出会い方 (いのちとの出会いいかた) やまのこ保育園 柏木拓人	動物園で自然体験の アフタースクール! 〜森のようちえん以後の 子どもの居場所〜 札幌まるやま自然学校 小杉生奈子	幼児教育と学校教育 の学びのつながりを 考えよう 森のこども園てくてく 小菅江美	こどもおとなも幸せになる 自然保育のススめ 山の遊び舎 はらぺこ 小林成親	森のようちえんと Resilience 私と出会う森 チャン・ヒ・ズン
発達がゆっくりな子と 過ごす野外保育の事例 青空保育たけの子 辺見妙子	食から未来を創る!食で変わ る子どもの心と体・八世代先まで の命の紡ぎ・持続可能な健康長寿 社会の実現のために(前編) ギフトッド 前島由美 食育心理®研究所 国光美佳 東京科学大学 安達 貴弘	頭は面白いことを考える ためにだけ使えばいい 森のようちえんびばら 松下おとじろう	世界と出会う 「感覚」という扉を開く 森のこころね 松山道子	目から鱗のアイデア! これからの選ばれる魅力 ある園づくりと運営継続を 考える 大沼流山牧場 宮本英樹	母が立ち上げた 森のようちえんのあれこれ 野外保育とよた森のたまご 遊佐美絵 森のようちえんこぞあとの森 塚本絵美

13:30~15:30

※法人格略称・敬称略

「Haha-moriプロジェクト」 って何?人づくりから 森づくりへシフトした森の わらべの新たな挑戦 自然育児森のわらべ多治見園 浅井智子	私たちのナラティブツリー 〜書いて、語り合って、 子どもの隣へ今日もまた 東香会 青山誠	森のようちえんのその先って? 子どもの“卒園後”とその学び のかたち ネイチャーセンター 内田幸一 よみたん自然学校 小倉宏樹	焚火の楽しみ方と リスクマネジメント 森のようちえん 全国ネットワーク連盟 笠倉秀貴	子供も喜ぶ、安心安全 な食事の調理方法 亜里屋 金洲貞子	もりもりもりっと ウクレレならそう! 辻山ウクレレ教室 ツジヤマガク
コミュニティ作りとしての 森のようちえん〜 大人たち・地域・自然との つながりの中でその「育ち」 青空保育べんぐさ 土井三恵子 青山学院大学 菅野幸恵	「森のムッレ教室」の紹介 —スウェーデン発祥の自然体 験及び環境教育— 山五十嵐こども園 富樫雄基	映像記録で紐解く「学びのあしあと」 〜せた森のようちえん&しょうがっ こう、フリースクール「スキニシー学校」 の子どもたち〜 せた森のようちえん 西澤彩木 スキニシー学校 林浩一郎 滋賀大学 山本一成	おとなも 森のようちえん体験 new education LittleTree 野村直子	まおい学びのさとの 食と農と子育て まおい学びのさと 藤田晋平 市川竜之助	食から未来を創る!食で変わ る子どもの心と体・八世代先まで の命の紡ぎ・持続可能な健康長寿 社会の実現のために(後編) ギフトッド 前島由美 食育心理®研究所 国光美佳 東京科学大学 安達 貴弘

まきば保育園のあゆみ
〜開園から現在まで〜

まきば保育園 山口満





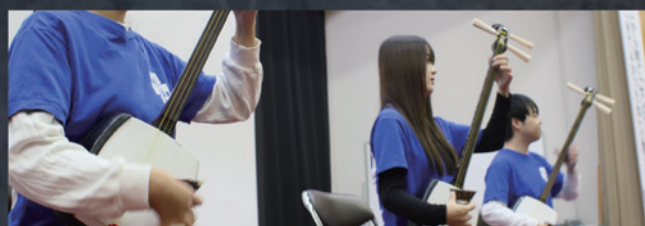
のようちえん

全国交流フォーラムin青森

開会式

「第20回森のようちえん全国交流フォーラムin青森」の開会式が11月1日に、フォーラム会場である青森大学の記念ホールで行われました。

全国から幼児教育・保育・子育て支援関係者や野外教育・自然教育の関係者、行政関係者、研究者、学生等が集い、テーマ「いのちの根を見つめなおす」のもと、3日間が始まりました。開会式では、森のようちえん全国交流フォーラムin青森実行委員長・佐々木豊志氏より挨拶があり、東北6県から実行委員が集い、オール東北で参加者を迎える本大会への思いが語られました。また、20回目の節目にあたり、第1回フォーラムの成り立ちにも触れながら、これまでの歩みを振り返る時間となりました。あわせて、ご支援をいただいた企業・団体の皆さまへの感謝が述べられ、その後、3日間の全体スケジュールが紹介されました。



受付

受付は、実行委員や学生ボランティアなど10名体制で行われました。子ども連れや大きな荷物を持った参加者にも配慮しながら、名札と配布物を手渡し、それぞれの会場へと案内しました。また、東北6県の実行委員が集う「オール東北」で参加者を迎える思いを込め、岩手の海女さん、秋田のナマハゲなど、東北各地を感じさせるキャラクターたちも登場し、受付まわりは笑顔あふれるにぎやかな空間となりました。





基調講演

独立研究者
森田 真生 氏

いまここから紡ぐ「センス・オブ・ワンダー」
～「きてよかったね」と言える世界へ～

ご紹介ありがとうございます。今日はどうぞよろしくお願いします。
みなさん、こんにちは。

京都から来ました。東北には最近、岩手や秋田には比較的頻繁にきているんですけど、青森はかなり久しぶりです。

昨日、初めて三内丸山遺跡に行きました。実際に行ってみたら、期待していた以上に感動しました。建築が計画されて設計されてから作られるというよりは、素材と対話しながら、結果的に構築ができていく。そのプロセスのようなものを感じたんですね。玄関というか、村の正面入口が広く開かれていて、まず僕たちを迎えてくれる。普段の暮らしが自然とともにあったからこそ空間認識なんだろうと思いました。

ものを作る時も、人間が頭で考えてデザインして、ディスプレイの前に座って設計して、ということではなくて、そこにある木や、暮らしの中で出会う自然の素材と対話しながら、木が持っている丸みや曲がり方に導かれるようにして、ものが作られている。その風景の美しさに、結構心を打たれました。

その後、夜に青森駅前へ行行って、現代的に開発された街の風景も見たんですけど、三内丸山にあの遺跡を生み出したすぐそばの街並みが、五千年経つとこういうことになったのか、という、ちょっと複雑な気持ちにもなりました。

人間は、毎回一からやり直す

何かを作る時に、僕たちが想像したり、何かを見出したりする時の先生って、人間である前に偶然だと思うんです。

みなさんは森のようちえんに携わっている方が多いと思います。新たな年少さんの子どもたちがやってきて、新しい子どもたちと接する、そういう営みをされていると思うんですけど、人間の面白いところは、毎回一からやり直すところにあるんじゃないかと思うんですね。

何十年かの人生の間にいろんなことを経験して、考えて、学んで、成長して、発見して、気づいて、感動したり、落ち込んだり、悲しんだりする。でも、その経験は、その人の人生とともに一回消えていく、また次の世代は受精卵という一つの細胞から、もう一度やり直すわけです。

一生かけて学んだことが、そのまま次の世代に受け渡されるわけではない。次にやってくる人たちは、もう一回最初からやり直す。つまり人間は、最初から同じことを何回も何回もやり直していく存在なんだと思うんです。

山を歩いたことがある、森を経験したことがある、海を見たことがある、空を見たことがある、そういう大人たちが生きている世界に、新しい子どもがやってくる。彼らは、初めて空を見て、初めて山を登って、初めてカニを追いかけて、初めて魚が手の中でびちびちしているのを体験して、初めてセミを捕まえて、初めてキノコが生えていることに驚く。

人類が何十万年も繰り返してきたはずのことを、遅れてやってきた子どもたちがもう一度やり直して、初めての感動として目を丸くして驚く。その、遅れてやってきた人たちと、すでにそれを経験している人たちが出会うというのが、学びの場面の非常に不思議な構造なんじゃないかと思うんです。



センス・オブ・ワンダーは 大人も子どもに助けられて思い出す

レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』の中で、僕はこの言葉を「驚きと不思議に開かれた感受性」と訳しました。カーソンは、子どもたちがその感受性を保ち続けるためには、少なくとも一人の大人の助けが必要だと書いています。

でも僕自身の実感としては、大人が忘れかけていたセンス・オブ・ワンダーを思い出すためにも、子どもたちの助けが必要なんです。

僕自身、そういう生物学の素養があるわけじゃなくて、子どもが生まれるまで、自分でバッタを捕まえたこともなかったんです。子どもと遊んでいて「バッタ捕って」と言われると、さも取ったことがあるかのように冷静にしていますけど、実は取ったことがない。やっと掴めた時には心の中で「初めて掴んだ」と感動しているんだけど、表向きは平然と「こうやって掴むんだよ」と言っている。

子どもたちのおかげで、実は人生二周目というか、一周目では経験できなかったことを、いろいろ経験しながら変わっていった実感があります。だから、僕自身は子どもの助けを借りることで、自分がそれまで知らなかった世界を学ばせてもらっているんです。

うちの長男は、生まれた直後に大きな手術をしました。生まれてしばらく、NICUにいて、毎日病院に通う中で、僕は「いつか彼に、この世界には空があるということを教えたい」と強く願うようになったんです。病院には窓がなくて、ずっと警報音が鳴っていたので、いつか外に出て、空があること、静けさがあることを教えたいと思っていました。ありがたいことに、一か月ちょっとで退院することができて、その日に一緒に病院の外に出て、腕に抱きかかえて空を見上げました。彼は空を見て、安心したように眠って、一緒に家に帰っていきました。

家に帰って初めて、静けさの中で胸に抱えて子守唄を歌ったんです。すると、僕の父親が三十年前に僕に子守唄を歌ってくれていた、その声をはっきり聞こえたんです。

父親はすごく忙しくて、子育てに関わっていた記憶はほとんどなかった。でも、自分の息子に子守唄を歌った時に、父の声が聞こえてきた。それは、思い出したというより、「今、聞こえた」という感じでした。三十年前に発せられた父の声が、三十年かけてやっと今届いた。そういう感覚でした。

だから、言葉が届くとか、声が届くというのは、とても時間がかかることがあるんだなと思いました。真剣に語ったことが、その場ですぐ届くとは限らない。でも、長い時間をかけて、ある時ふと、「あの時言っていたのはこういうことだったのかもしれない」と届くことがある。0歳の子どもと共にいるというのは、0歳の自分自身が受け取った何かを感じられる状態になるということでもあるんです。

宇宙から地球を見るように 子どもを通して子ども時代を知る

大人になって子どもと接するというのは、宇宙へ行って地球を振り返ることに少し似ている気がします。ちょっと前まで自分は3歳だったはずなのに、もう二度と3歳にはなれない。振り返ってみた時に、さっきまであんなところにいたんだ、とを感じる。

子どもたちと一緒にいると、本当に人生の二回目というか、3歳の子といると3歳を二回目に経験することができて、10歳の子と一緒にいると二回目の10歳を経験することができる。そうやって人間は、大人と子どもが相互に刺激し合いながら、人生を何回も繰り返していくようなことをしているのかなと思うんです。

だから、子どもというのはとても素晴らしくて、彼ら彼女らを持っているセンス・オブ・ワンダーは尊い。それは大人になると失ってしまう、という単純な話ではないと思っています。子ども自身では気づけないことがあるし、大人だけでは気づけないこともある。大人と子どもが時間差で出会う、そのコラボレーションの中で、初めて見えてくることがあるんだと思います。

生まれるということは、遅れてやってくることなんだと思います。僕たちは、まさるな場所に初めての命として生まれてくるわけではなくて、すでに命あふれる惑星に、遅れてやってくる。

生きるためには呼吸をしなきゃいけない。呼吸をするためには大気が必要で、その大気を作り出してくれてきたのは、無数の微生物たちや植物たちの何億年にもわたる生命活動です。そういう膨大なお膳立てがあって、僕たちは生まれてくることできる。だから生まれるということは、遅れてやってくることなんです。

遅れてやってきた人にとっては、先に生きてきたものたちが先生になります。でも、その「先に生きているもの」というのは、ほとんどは人間ではないわけです。人間に先立ってこの世界で生きてきたのは、人間ではない人たちなんです。

僕の高校の先輩に、鈴木俊貴さんというシジュウカラの研究をしている人がいます。彼は、シジュウカラには言語があるという研究をしていて、森の中でシジュウカラを観察していると、シジュウカラの言葉を理解しているのはシジュウカラだけじゃないと言うんです。ヤマガラやコガラも分かるし、リスもシジュウカラの言葉を理解している。シジュウカラが「鷹が来たよ」と鳴くと、リスは逃げる。つまり、リスは自分だけでは見えない世界を、シジュウカラの力を借りて知っているわけです。おそらく人間もかつてはそうだったはずで、自分たちの周りにいたさまざまな生き物たちの声を聞いて、自分だけでは知覚できない範囲については、他の生き物たちに教えてもらっていた。

でも、現代では、人間は人間以外とコミュニケーションできないことになっている。小さい子がタンポポに「おはよう」と話しかけると愛らしく見えるけれど、大人が同じことをすると変わった人に見られる。そういう世界になっているんです。

それでも今でも、植物に話しかけるような人はいる。秋田の阿仁町に増田耕さんというマタギの方がいて、彼は植物学を研究していて、山に入り続ける中でマタギにもなった人です。彼と一緒に山を歩くと、彼は植物に話しかけるんですね。ブナの木に「今年は花を咲かせてねえな、大丈夫か」と声をかけたり、山菜に向かって「お前ら本当に報われているな」と話しかけたりする。

人間だけが言葉を持っている、人間だけが知性を持っている、というのは、ある時代に生まれた特殊な思想なんです。日本には「山川草木悉皆成仏」という考え方があって、山や川でも、草や木でも成仏するという思想があった。これは、日本の多様な自然の中で育まれてきた、非常に重要な哲学だと思います。

人間にとって学びとは自然の中で行うものであって、人間にとって学びとは、人間以外から学ぶことなんだと思います。

大学という仕組みがつくった「学び」のかたち

ある時から教育というものが制度化されて、特に「普遍的な学び」というものがある、というアイディアがヨーロッパで生まれてきます。現代の大学制度、ユニバーシティという仕組みができたのは十九世紀初頭のベルリンですけれども、このユニバーシティという制度のアイディアは何かというと、知の分業なんです。

世界というのは複雑で、考えなきゃいけないことがたくさんある。だから、一人で全部考えようとするんじゃなくて、みんなで分担しよう、と。みんながそれぞれの専門分野をしっかりと掘り下げて研究して、それをあとで足し合わせることができれば、素晴らしいことになるに違いない。これが大学の理念だったわけです。

でも、そのしっぺ返しを、今僕たちは目撃しているんじゃないかと思います。地球の生態系や人体の構造は、問題を部分に分割してしまうと、命がなくなってしまう。問題を部分に分けて、一つひとつ解いてからくっつけるという方法は、限界にぶつかっているんじゃないかと僕は思っています。

にもかかわらず、今の教育は、理科の時間があり、社会の時間があり、国語の時間があり、算数の時間がある、そのすべてが分野に分けられて、一つひとつバラバラに勉強することをやる。しかも、それを教室の中でやる。

本来、学ぶというのは、野山を駆け回ったり、お父さんの農作業の手伝いをしたり、魚を取りに行ったり、生きるため、食べるための活動の中で起こっていたはずなんです。つまり、常に自然から学ぶべきだったはずなんです。でも、学校ができると、どこにいても同じ算数を学び、同じ自然科学を学ぶ、というかたちになった。

その普遍性には大きな意味もあったと思います。でも、その子どもが生まれ育っていく過程の中で、先生のほとんどが人間であるというのは、人類史の中でめちゃくちゃ特殊な状況なんです。だからこそ、いかにして子どもたちが人間以外に接触できる機会を作るかというのは、ものすごく切実な問題なんじゃないかなと思っています。

生きているとはどういうことか、元気がどうということなんだろう、生命とは何なんだろうということ、問題を部分に分解して、個々の問題の最適解を見つけ出していくというアプローチでは見えてこないんじゃないかと思います。すべてのつながりの中で総合的に直感して、人間以外のたくさんの生き物たちに囲まれながら、全身で学んでいかなきゃいけないことなんじゃないかと思うんです。

そう考えていくと、哲学の歴史も違って見えてきます。例えばソクラテスって、お父さんが石工だったんですね。石を使って道を作ったり、石材を加工したりする名手だった。ソクラテスは、小さい時にそういう仕事の手伝いをして育って、年がいったから哲学者として認識されるようになるわけです。





例えば空海が満濃池の施工に関わったことは、皆さんご存知だと思いますし、松尾芭蕉という人も、もともとは江戸で上水の浚渫工事に関わっていた。そういう仕事で力を発揮したことが、その後の活動の基盤にもなっていった。さまざまな思想家とか哲学者とか言われている人たちが、実は若い時に土木に携わり、水や風の流れをよくするという仕事の中で能力を発揮してきた歴史があるんです。それは考えてみれば当然のことで、人間が生きたため、考えるため、生活するためには、まず人間に先立つ自然と共に暮らす知恵が必要だからです。人間が生きたための最も基盤にあるのは、水の流れや、土との付き合い方や、そういう意味での土木なんだと思います。

空海みたいな人が生まれる教育とは何か

なので半分メタファーでもあるんですけど、例えば空海みたいな人が現代に生まれる教育って、どういうものなんだろうと考えるんです。東大に合格するとか、ノーベル賞を取るとか、そういうことではなくて、空海みたいな人が生まれるような教育って何なんだろう、と。

それはきっと、教室で算数をやるとか、理科を勉強するとか、それだけではなくて、人間以外のものすごくたくさんの生き物たちにまみれながら、人間以外の自然からいろんなことを学んでいくという経験と、数学や物理のような頭を使う学問の高度な融合から生まれてくるものなんじゃないかなと思います。

今、広島の世界というところで、地元の企業の人たちと連携して、一つの山を舞台にして学びの場を作ることを考えているんですけど、そこで一つ、やっぱり土木っていうのを中心に置いています。みんな道を作ったり、駐車場を施工したり、そういう土木作業を職人から学んで、自分でもできるようになる。そのうえで、数学も物理も勉強する。そういう学びの場です。

そういう場から、さっき言ったような、空海みたいな人が生まれてくるような学びって、どういうことなんだろう、ということを考えているんです。

ただ、その時にすごく重要な問いがある。仮にそういう人が生まれてきたとして、彼らは一体どこで仕事をすればいいのか、ということなんです。学校というか、学びの場というものを考える時に、これはすごく重要な問いだと僕は思っています。

あまりにも創造的で、あまりにもユニークな人たちが育ってきた時にその人たちが働ける受け皿がなかったら、結局しんどい思いをするのはその人たちなんです。だから、学びの場を作るなら、同時に仕事の場も考えないといけない。教育だけでは足りないんです。ここで僕がずっと大事だと思っているのが、青木昌彦先生の「制度補完性」という考え方です。教育の制度というのは、その周りの医療の制度、法律の制度、経済の制度、そういうものと全部もつれ合っている。だから、教育だけのもすごく素晴らしくしても、その外側にある社会制度がそのままだったら、新しいタイプの教育を受けた子どもたちは、その社会と出会った時に苦しむことがある。

だから、教育だけ変えればいいわけじゃない。学びの場と、その先にある仕事の場、社会の仕組みまで、同時に考えていかなきゃいけないんです。

その舞台の一つとして、僕は食がすごく大事だと思っています。食というのは、実は森羅万象が結びつく場面です。人間はありとあらゆるものを食べるようになった。大豆も食べて、わかめも食べて、ほうれん草も食べて、きのこも食べて、鯛も食べて、牛も食べて、羊も食べる。そんな生き物はいない。人間の大きな特徴は、食の多様性なんです。

心を支えるものを、みんな探している

だから、みんな結構探しているんですよ。どうしたらいいんだろう、と。知性というものが、自分たちのよりどころにならなくなった時代にどうしたらいいのか。

京都にも最近、ヨーロッパの哲学者とか、シリコンバレーでめちゃくちゃ稼いだ人たちが集まってきています。お金はいっぱいあるんだけど、心が虚しい。何か学びたい。何か違う哲学がないか、と探しているんです。

その時に、知性というものが売りじゃなくなった今の時代に、僕があらためて注目したいと思っているのが食なんです。

食べるというのは、非常に根源的な想像とケアのかたちだと思います。たとえば、マタギの人たちが熊を授かる。もちろん熊は食料になるわけですけど、山に入って熊を授かるためには、熊みたいにならないといけない。熊だったらどこを歩くな、とか、熊はこの山の中で何を探しているのかな、とか、彼らは今どんなことを考えているのかな、ということ。熊みたい想像することができないと、熊との距離を縮めることができない。

あるいは、イワナを川で釣ろうとした時にも、イワナみたいにならないといけない。その相手みたいになるということができて、初めて命と命が接近することができて、「食べる」という究極の交わりのところまで到達することができるわけです。

僕は、食べるということの中に、ただ摂取すると消費するとかではない、人間が他の命に向かって想像力を働かせるという、とても深い営みがあると思っています。

ありとあらゆる生物種を食べる存在である人間というのは、ありとあらゆる生物種の身になって考えてみるができる、非常に特殊な生き物なんじゃないかなと思っています。

人間というのは自分だけで閉じている存在ではなくて、熊みたいになろうとしたり、イワナみたいになろうとしたり、植物の身になってみようとして、他の命の側へと想像力を伸ばすことによって、自分というものを作ってきた。そういう存在なんじゃないかなと思います。

そう考えると、僕たちがこれから生きていこうとする時に、食をどういうふうにか考えるのかというのは、すごく大きなテーマなんです。食料生産のあり方をどうするのか、食に対してどういうアプローチを持つのか。これは単なる栄養の問題じゃなくて、経済や政治や社会や、すべてのことが絡み合った大きなテーマです。

もし、百億人いるなら百億人みんな助かった方がいいんじゃないか、ということの本気で考えようとなると、とてつもない想像力が必要になります。その時に、一番重要なのは、食料生産のあり方、食に対するアプローチについて、まったく違ったビジョンを持つことなんです。

皆さんがやっているように、子どもたちにとって、もともと先生は自然だった。その「先生は自然だよ」という状況を全力でサポートしながら作っていくこと。そして、もしそこで本当に子どもたちがのびのびと育て、新しいタイプの人たちが生まれてきたとしたら、彼らが活躍できる場所を社会の中に作っていくしかないといけない。

そのためには、食のあり方という一番根本的なところに対して、新しいビジョンを作るんだという気概を持って、大人が社会を根本的に考えていくことが必要なんだと思います。

自分の場所で、自分にできることをやる

だから、誰でも、どこでもよくて、自分が今たまたま「学びたい」と思った、「考えたい」と思った、「何かしたい」と思った、その場所が、その人のユニークなポジションなんです。時間的な距離も、置かれている場所も、みんな違う。その自分から見えたことを一生懸命考えて、何か行動したら、そのユニークさが力になるわけです。

蜂が一匹、花粉を一つ運んでも、それだけで世界が変わるようには見えない。樹木が一つ新芽を出しても、世界が変わっているようには見えない。蟻が巣に一つの餌を運んでも、世界が変わっているようには見えない。でも、それが全部合わさると、とてつもなく世界が変わっている。

だから、自分がやった行為が世界を変えているように見えなくていいんです。自分のいる場所で、自分ができていることをやる。それをみんながやると、とてつもないことが起こる。それが、地球が今表現していることなんじゃないかなと思います。



内田 幸一 氏

佐々木 豊志 氏

【登壇者】

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟
名誉理事長 内田 幸一 氏

第20回森のようちえん全国交流フォーラムin青森
実行委員長 佐々木 豊志 氏

【モデレーター】

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟
理事 小倉 宏樹 氏

記念シンポジウム① 森のようちえんの【現在地】

森のようちえん全国交流フォーラムが20回目を迎えたことを記念し、
NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟が音頭をとって記念シンポジウムを開催しました。

森のようちえんという取り組みを、ネットワーク、そして全国交流フォーラムという手法を使って世に広め始めて20年が経ったことを受け、仮にこの先、例えば今後20年、森のようちえんという取り組みが継続されるとしたら、どんな方針やビジョンを持って、どんな方法で、どんな人に広げていくべきか、を考え、提案していくことを目的としました。

そこで、1日目のシンポジウム①では「森のようちえんの【現在地】」と題して、森のようちえんの20年をふりかえり、3日目のシンポジウム②では「私の森のようちえん宣言」と題してフォーラムで出会った学びや言葉、心動かされた瞬間の数々をこれからの一歩に繋げていくために「参加いただいたみなさんと連盟が取すべき方針を作り、提案する」ことを目標としました。



トークセッション

森のようちえんの【これまで】

20年にわたる、森のようちえん全国交流フォーラムの軌跡や森のようちえんの変遷等について、フロアあるいはモデレーターからの質問に対して登壇者の二人が答える形の対談でふりかえりました。

Q.過去のフォーラムで一番印象に残っている回とその理由は？

A.(佐々木) 今回を含め、実は実行委員長を4回経験しているが、やはり立ち上げをした第1回が一番印象深い。

A.(内田) 第3回の東京。全国ネットワークを作るための準備会を立ち上げた。あれがなければ今の連盟はない。

Q. 20年やってきてよかったと思う出来事は？

A.(佐々木) 開会式の挨拶の中で触れた今泉さんによるとドイツでは森のようちえんが当たり前になっている。20年ネットワークが続いたことで日本でも普通になる日が近いと感じられていることが良かったと思う。

A.(内田) フォーラムには森のようちえんを盛り上げようというエネルギーが集結している。落ち込んでいる時にフォーラムに行くとエネルギーをもらって自分にとって大きな力になった。

A.(佐々木) 私も4回目の時にエネルギーをもらった。2008年に岩手・宮城内陸地震で被災した後だったから、元気をもらって帰ることができた。

Q. ネットワークのターニングポイントはいつあったか？

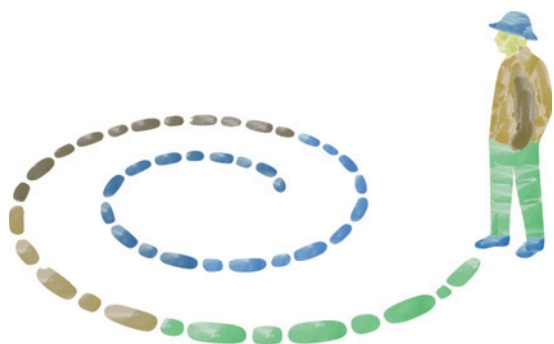
A.(内田) いつだったかは記憶にないが、確か川崎市黒川青少年野外活動センターで理事会を開催した時に、理事の体制が弱いと感じていたのでちょっと腹を立てて覚悟があるのかと聞いたことがある。その時の理事が覚悟を決める決意表明をしてくれた。あれが大きなターニングポイントだった。

A.(佐々木) 長野県と鳥取県が認証制度づくりに取り組んだ。その後、2018年には森と自然の育ちと学び自治体ネットワークが立ち上がり、17の県と市町村が加入した。それが大きなポイントだったと思う。

Q. しくじったことは？

A.(内田) やってみたいと分からないことを子どもを実験台としてやっていた側面もあったと思う。そこは今考えると子どもたちに悪いことをしたなと思う。

A.(佐々木) たくさんあるけど一番は経営。のっけからしくじって相当苦労した。30年間なんとか潰れずにくりこま高原自然学校は続いているけど、もっと良い経営ができたと思う。経営の本質は知識ではなく、暗黙知と言われる経営者の感覚。



Q.立ち上げの時にやっておくべきこと、続けていくために必要なことは？

A. (内田) 続ける決意。うまくいかないことはいっぱいある。でも、続けるって決めたら続けること。いよいよダメになったら諦めればいいだけのこと。

A. (佐々木) 決断。判断と決断は違う。判断は過去。過去のデータによってしかできない。先のことを考えるのであれば決断する力がないとダメ。

Q.NPOでも収支計算書とか貸借対照表とか数字に長けた人がいたほうがいいと思うが、その点についてどう思うか？

A. (佐々木) どんな組織も持続的にやるためには金と情報は必要。お金をきっちりわかっている人はいた方がいい。大雑把でもいいので。

A. (内田) 表面的な数字にとらわれず、その数字が何を意味しているかと言うことを考える必要がある。そのデータを使って自分がどの方向に目指していくのか、次の一手を打てるようになってこそ、数字に強いと言える。

Q.森のようちえんを20年続けていたら、20代30代になっている子どもがいるが、その子達をみて感じることは？

A. (内田) 子どもの根っこを育てたことは間違いない。何が大切かということを自分たちで分かって行動していることが成長した人たちから感じ取れている。

A. (佐々木) ペリー就学前プロジェクトというのがあって、それによると森のようちえんのような活動をした子は非認知能力が上がっているという研究結果が出ている。自己肯定感が高いとか、レジリエンスが強いという結果も出ている。

Q.森のようちえんを学びたいという保育士や学生が増えているが、その人たちに対して思うことは？

A. (内田) 幼児教育って一体何なんだといつも自分に問いかけて、自分の中の課題みたいなものと向き合ってほしい。お手本があるわけではないし、完成型があるわけでもないの、常に自分の中にそれを振り返ってほしい。

Q.森のようちえんは保護者のコミュニティづくりという側面もあるが、そのことに関してどう思うか？

A. (内田) 保護者もそれぞれに経験・能力・個性があり、森のようちえんではそれを最大限発揮することができると思う。

A. (佐々木) くりこま高原自然学校で不登校・引きこもり・ニートを預かる寄宿をやっていた。その時に、幼児期の体験が良くないことに原因がある人もいると感じた。覇気がない。車に例えると「野性」はエンジン、「知性」はハンドル、「理性」はブレーキ。まずエンジンがあって、脱輪しないためにハンドルがあって、ぶつからないためにブレーキがある。だからまずエンジンである「野性」を育まないといけない。それが、覇気がない子は「野性」が幼児期に削がれているように感じる。そのことを親御さんたちに伝えたい。

The Network Now

全国ネットワーク連盟の今

現在NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟として取り組んでいる内容を紹介しました。

< 仲間を育てる >

- ◎指導者養成講座【担い手の育成】
- ◎森のようちえんマルシェ
- 【実践者の学び合い、繋がり促進】
- ◎普及イベント【スタートアップ支援】

< 普及の広がり >

- ◎Mori-Yoチャンネル

< 安全を作る >

- ◎団体安全認証制度
- ◎安全講座
- ◎リスクマネジメント研修

< 現場を支える >

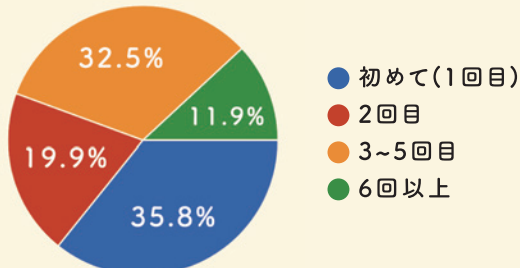
- ◎地域ネットワーク支援
- ◎かたりば・森のようちえん大学校
- ◎実態調査
- ◎国への働きかけ

私たち（参加者）の「現在地」 アンケート結果

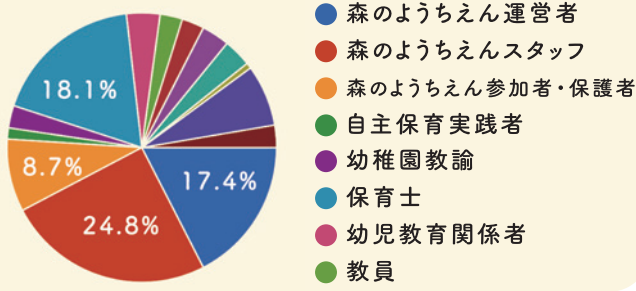
事前に参加者のみなさんに、各自のスマホを使ってQRコードからGoogleフォームに入力してもらったアンケートの結果を紹介し、私たち（参加者）の現在地を探りました。

* Googleフォームから入力してもらったデータが反映されたGoogleスプレッドシートからグラフを作成しました。
そのことで追加で入力されたデータもリアルタイムでグラフに反映されました。

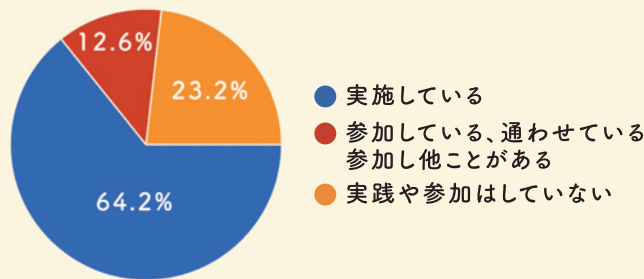
フォーラムへの参加回数（今回含めて）
151の件回答



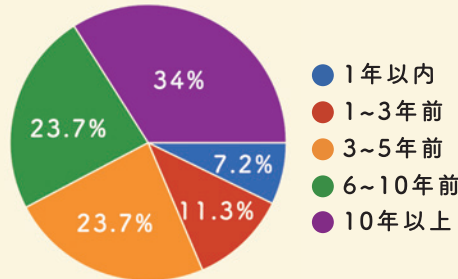
あなたの立場を教えてください
（複数のお立場がある方も1つのみを選択してください）
149の件回答



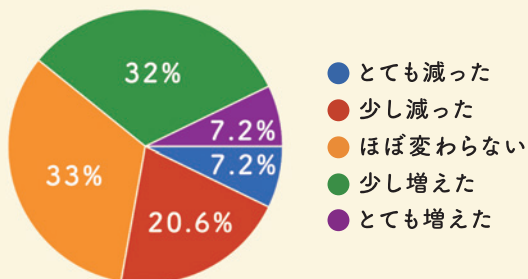
実践者への質問
森のようちえん（イベント型・日常型・自然学校型等含めて）を現在実践または参加しているか
151の件回答



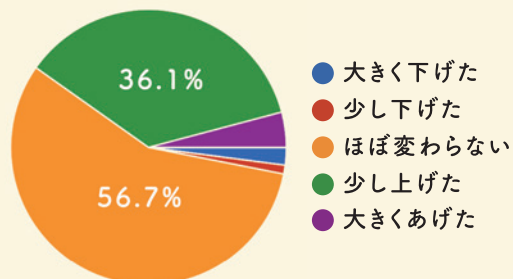
いつから森のようちえんに関わるようになったか
97の件回答



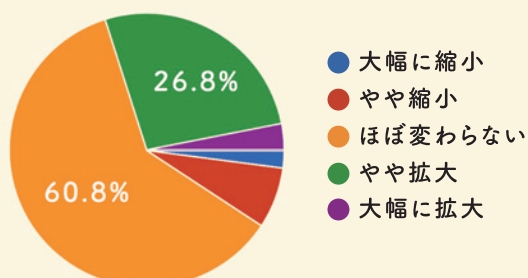
ここ2年、その前と比べて園児参加者が
97の件回答



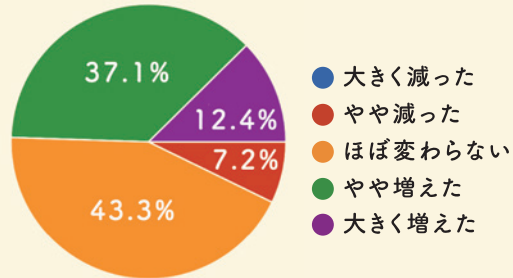
ここ2年、主要な実践の参加費（保育料）は
97の件回答



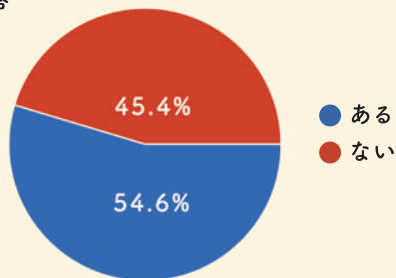
ここ2年、実践や運営を
97の件回答



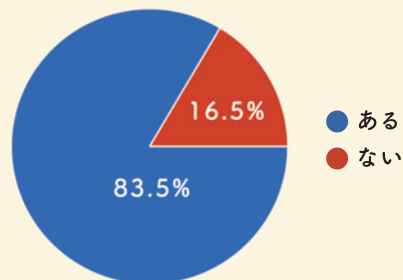
実践を応援してくれる人、関わってくれる人は
97の件回答



近隣保育園幼稚園と、なんらかのつながりがあるか
97件の回答



実践者ではない参加者やその他の方への質問
行政（市町、都道府県）となんらかの繋がりがあるか
97件の回答



アンケート結果を受けて、登壇者の二人にコメントを求めました

（内田）森のようちえんの参加者は減少していると思ったが、過去2年のデータでは大幅減は確認されなかったことが興味深い。ただ、幼児教育無償化の影響で新規立ち上げが抑制されている可能性があるのも、より詳細な分析が必要だろうと思う。

（佐々木）自然保育への教育的期待は高まる一方、熊出没など屋外活動の制約が逆効果を生むことを懸念している。秋田は特に大変だろう。

記念シンポジウム①の振り返りはこちらからもご覧いただけます



青森フォーラム記念シンポジウム振り返り第1話

「Mori-Yoチャンネル」

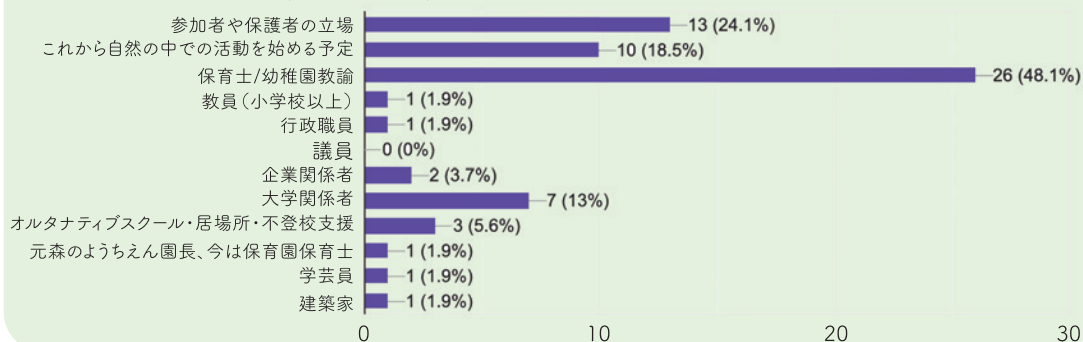
3日目（11月3日）のシンポジウム②に向けて

最後に参加者のみなさんに「宿題」を出しました。

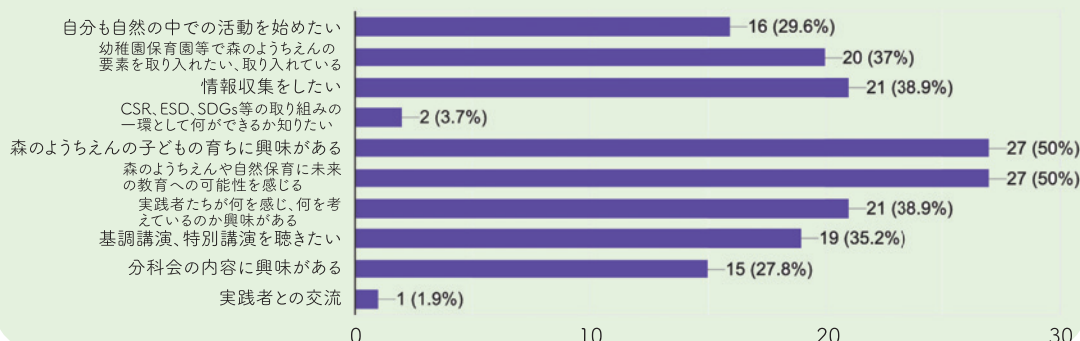
2日目の分科会で様々な学びを得た後、3日目のシンポジウム②で、それぞれに【私の森のようちえん宣言】を表明していただきます。「私はこの先だいたい5年に向けて、まずはこれをやる」をみんなの前で発表するのです。「そんなこと言われても」と困っちゃうかもしれません。でも大丈夫です。今隣に座っている、会ったこともない人の中に、そんなチャンスや接点があるかもしれません。3日間で多くの人と語らい、多くの情報を引っ張り出してください。と投げかけました。

また、3日目のシンポジウム②で連盟としての森のようちえん宣言出す予定です。それを考えるにあたって、参加者のみなさんに「今の活動の強み」「こどもを取り巻く環境における課題」などについてアンケートで回答をもらいました。こちらも各自のスマホを使ってQRコードからGoogleフォームに入力するやり方で。回答をもらった後に、シンポジウム①「森のようちえんの【現在地】」は幕を閉じました。

属性を教えてください（複数回答可） 54件の回答



本フォーラムへの参加動機は？（複数回答可） 54件の回答



情報交換会・交流会 ①

11月1日の17時から19時まで、青森大学レストランにて交流会を行いました。

会場では、全国から集まった参加者、講師、実行委員が軽食を囲みながら交流し、名刺交換をしたり、近況を語り合ったりする姿が見られました。初めて参加した人も常連の参加者も、新たな出会いにつながる時間となりました。久しぶりの再会を喜ぶ人や、フォーラムを通じて知り合い、1年ぶりの再会を喜ぶ人の姿もあり、あたたかな交流の場となりました。



それぞれの活動地域や日々の実践を紹介し合いながら、その地域で大切にしていることや日頃の工夫について語り合う様子が見られました。また、その日に行われたプログラムの感想や心に残った内容についても伝え合い、それぞれが学びを持ち帰る時間となっていました。



森のようちえんウルトラクイズでは、20回目の節目にちなみ、これまでの森のようちえんの歴史や歩みをふり返る問題も数多く出され、会場は大いに盛り上がりました。

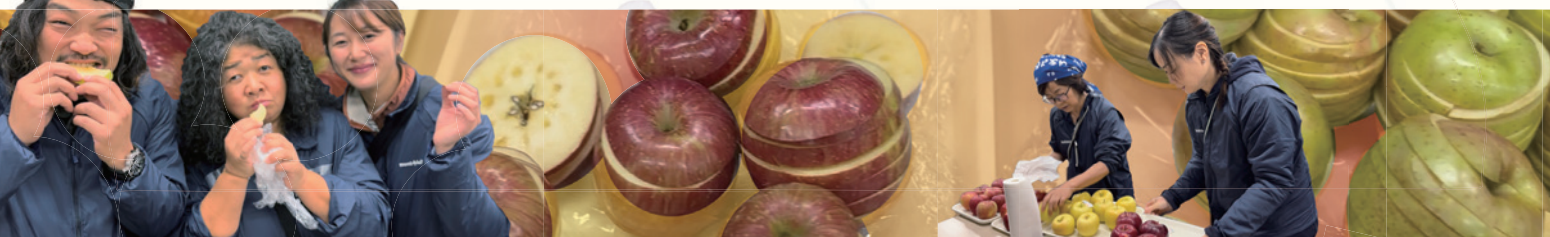


360度、仲間。

懐かしい再会も、新しい出会いも、人と人のつながりが自然に広がっていく交流の場となりました。



地域の味を届けたいという思いから、実行委員が真心を込めて調理した絶品の「たまごんやぐ」



会場には、サンむつやトキをはじめ、青森ならではのさまざまな品種のりんごが用意され、ききりんごを楽しみながら交流が深まっていきました。りんごは、対話の時間にも手に取りやすいよう、食べやすい輪切りにスライスして提供され、食を通じて自然に会話が生まれる場にもなっていました。



本冊子特別企画 誌上対談

20年をふりかえり、次の長野へ

第20回森のようちえん全国交流フォーラムin青森
実行委員長 佐々木 豊志 氏

第21回森のようちえん全国交流フォーラムin長野
実行委員長 内田 幸一 氏



佐々木 豊志 氏

内田 幸一 氏

森のようちえんが大切にしてきた学びをふりかえりながら 次の長野フォーラムと、その先の未来について語り合いました

——森のようちえんがこの20年で大切にしてきたものは何だったのか、お二人にうかがいます。

（佐々木）森のようちえんの全国ミーティングとしては20回になりますけれど、内田さんはそれ以前から、1980年代から関わってこられましたよね。まだ「森のようちえん」という言葉ではなかった頃、飯綱ではどんな言い方をしていたんですか。

（内田）最初の頃は、「お山の小さな幼稚園」という感じでしたね。まだ「森のようちえん」という言葉自体がなかった時代です。

（佐々木）内田さんは幼児教育や幼稚園との関わりから入って、80年代に飯綱で始めてこられた。一方、私は野外教育が入口でした。幼児キャンプからスタートして、冒険教育として小学校や中学校のプログラムを開発してきたんです。

それで20年前、「森のようちえん」というキーワードで全国の集まりをやりましょうと相談した時に、実はその頃、不登校や引きこもり、ニートの若者たちとも関わっていました。そうすると、どうもその子たちの幼児期の体験があまりよくないと感じたんです。やっぱり幼児期の自然体験は大事なんじゃないかと、改めて考え直したんですね。そこへドイツの森のようちえんの紹介や、内田さんたちの実践も重なって、これは全国で集まる場をつくろうというのが20年前のスタートでした。

（内田）そうですね。栗駒で第1回目が始まったことが、このネットワークができていく入り口になったし、森のようちえんが全国に広がっていく最初の起点になったと思います。それまで森のようちえんという明確な定義があったわけではなくて、ぼつぼつと実践は始まっていたんです。その中で考えていたのは、幼児期の子どもたちの育ち方でした。

幼児期というのは、外的な刺激をたくさん受ける時期です。教育と称して、大人の考えたプログラムや教材、知育的なことが入りやすい。一般的な幼稚園や保育園も、かなり大人主導型だったと思うんです。大人が内容を決め、その中で幼児が動いていく。それに対して、森のようちえんはかなり違ってました。どちらかというと、子ども中心に考えていく。子どもの主体性や、子ども自身の行動をあまり規制しない。そこに引っかかった人たちが、森のようちえんの方へシフトしていったんだと思います。

子ども主体の学びは、何を育ててきたのか

（佐々木）私は野外教育や冒険教育の視点から見ても、まさにそこは共通していると思います。子ども主体になって、主体的にどう取り組むか。その中で学びが身についていく。大人が指示したり、ああだこうだと教え込んだりするところじゃない。体験を通して、子どもが自分で考えることが大事なんです。

森のようちえんが大事にしてきたのは、体験であり、対話であり、子どもがどういう思いで活動するかということだったと思います。何をどう体験させるのか、大人はどういう立ち位置でどう関わるのか。そこが他の幼稚園との違いだったし、それが自然の中で行われるということに大きな意味があったんだと思います。

（内田）そうですね。子どもを主人公にするというか、子どもを主体に置いていくという考え方は、もともと森のようちえんの中にあったんです。ただ、対象が幼児期なので、大人の側には「子どもの能力はこの程度だろう」とか、「こういうことしかできないだろう」といった先入観がどうしてもあった。

でも、そうじゃないだろうと。幼児だって一人の人間として、自分で考えるし、いろんな思いを持っている。それは当然のことなんです。ところが、過去の幼児教育はそうは考えてこなかった。大人がいろんなことを提供して、大人の用意したものの中で安全に活動していく、という形が一般的だったんです。

でも、それだと子どもの主体性は育ちにくい。子どもが主人公になるとはどういうことなんだろう。そこを考えていった時に、やっぱり自然の中で、できるだけ人工的なものから離れて、子どもたちがいろんなものに出会って、自分で感じ取り、そこで起こる問題や課題を自分たちなりに乗り越えていく、そういう場が大事だと考えるようになりました。

（佐々木）子ども自身が体験を通して考えるんですよね。大人があれこれ指示すると、子どもは考えなくなる。だから時間はかかるけれど、子どもが考える時間をどう保障するか、そこをずっと大事にしてきたと思います。

（内田）自然の中にいるといろんなことが起こります。全部が用意された環境じゃないので、大人が最初から「今日はこういうプログラムでやります」と決めることもあまりしない。子どもたちが思う存分、自然の中でいろんなものに出会っていく。そこで感じ取るものがあるし、出くわした問題や課題を自分たちで克服していかなきゃいけない場面も出てくる。そこに主体的な動きが生まれるんです。

受け身で動くんじゃない。大人が「こうやって解決するんだ」と答えを与えるのではなくて、「じゃあどうしようか」「どうなったらみんないいと思う?」と問いかけていく。そうすると必然的に対話型になっていくんですね。

(佐々木) 幼児期の学びって、結果がすぐには出ないじゃないですか。でも、ペリー就学前プロジェクトの追跡研究なんかを見ると、主体的に学ぶプログラムを経験した子どもたちは、非認知能力が育って、その後の人生が豊かになっていくという結果が出ている。年収や進学率、犯罪率の違いまで出てくるわけです。

非認知能力って、コミュニケーション能力とか、リーダーシップとか、目標を立ててやり抜く力とか、諦めない力とか、そういうものですね。森のようちえんが大事にしてきたことは、まさにそこだったんだなと感じています。

20年前、その違和感は何に向いていたのか

——今でこそ、非認知能力とか、対話型とか、アクティブラーニングとか、言葉として整理されてきましたが、20年前はまだそういう言葉も一般的ではありませんでした。むしろ、大人が子どもに指導することが当たり前とされる教育環境の中で、お二人はどんな違和感を持っていたのでしょうか。

(内田) 私なんかは、もともと変わった人間だから、みんなが「これがいい」と言っていることを、そのまま信用しないタイプなんです。本当にそうなんだろうかと自分で確かめてみたかった。幼児教育の世界でも、いろんなことが正しいとされていたわけですけど、それが本当に子どものためになっているのか、自分の中ではずっと問いがありました。

それまでの幼児教育の中には、大人が考えたプログラムや教材、知育的な働きかけが入りやすかったし、大人が内容を決めて、その中で子どもが安全に動くという形が当たり前のようにはありました。でも、それでは子どもの主体性が伸びにくい。子どもはもっと自分で感じて、考えて、動ける存在なんじゃないか。そこにずっと違和感があったんです。

(佐々木) 私の場合は、野外教育や冒険教育の側から見てきたので、体験の中で子どもが自分で考えることの大事さをずっと感じてきました。大人が「あれしろ、これしろ」と指示してしまうと、子どもは考えなくなる。だからこそ、考える時間をどう保障するか、どう体験させるか、大人はどういう立ち位置で関わるか、そこがすごく大事だったんです。

20年前に大事にしていたことは、今でいう非認知能力の部分だったんだろうなとも思います。森のようちえんがやってきたことは、まさにそこだったんだと感じています。

次の長野では、何を見据えるのか

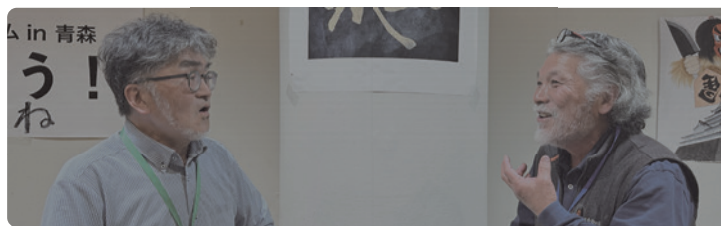
——20年の節目を越えて、次の長野ではどんな未来を見据えようとしているのでしょうか。

(内田) 今までのフォーラムの延長線上にはあるんだけど、もうひとステップ上に行きたい、という思いがあります。フォーラムとは何なのか、ということも、もう一度考えたいんです。単なるお祭り騒ぎではないので。20周年を経て、次は社会化をさらに進めていく段階なんだと思っています。未来に向かってどんな方向性を目指していくのかも含めて、いろんな世代の

人たちでやっていきたい。子どもたちも含めてです。未来があるのは子どもたちですから、彼らが主人公になれる社会をつくっていききたいんです。

(佐々木) 私も、教育って未来をつくるための営みだと思っています。これからは本当に不確実な社会で、何がどう起こるか分からない。だからこそ、どう対応していくのか、どう問題解決していくのか、どうよりよくしていくのか、そういう力が必要になる。その力が、次の未来をつくっていくんだと思います。

私自身、中学校の時に岩手山登山を経験して、自然の中で「どうにも変えられないものがある」と叩き込まれました。嵐の中で、山が大きいことも、雨が降ることも変えられない。文句を言っても変わらないんだから、自分が受け止めて歩くしかない。その経験がすごく大きかったです。自然の中での体験って、教室では得られない形で、自分を変えることや、問題に向き合うことを教えてくれる。だから、森のようちえんで育つ子どもたちにも、そういう力を身につけてほしいと思っています。



これからの社会に必要なのは 「接点」をつくる人

(内田) 私は、これからの社会は三つくらいの層に分かれていくんじゃないかと思っているんです。ひとつは、テクノロジーを信じて進んでいくスマート社会の人たち。もうひとつは、そこから離れて自然寄りの暮らしを選ぶ人たち。そして、その両方をうまく行き来しながら、つないでいく中間層の人たちです。

この中間層の人たちは、すごく大事な役割を担うと思っています。たとえば自然農法でつくられたものには大きな価値がある。それをスマート社会の人たちにつないでいくのも、中間層の役割かもしれない。あるものとなないもの、こちら側にあるものとあちら側にあるものを結びつけていく。そういう接点をどうつくるかが、これからとても大事になると思うんです。

(佐々木) まさに、そこは接点ですね。異なる意見の人たちが遮断し合うのではなくて、接点を持って新しいものを生み出していく。そういう能力って、森のようちえんの子どもたちを見ていると鍛えられていると思うんです。相手のことを考えること、自分のことをちゃんと言うこと、違う意見を何とかしようとする。これって未来の社会ですごく大事な力だと思います。

(内田) そうなんです。接点がうまくつくと、結局は対立の構造になってしまう。利害だけで動いて、どちらが得か、どちらが儲かるか、という話になってしまう。でもそうじゃなくて、どうしたらみんなにとってよりよい関係をつくれるのかを考えられる人材が必要なんです。



森のようちえんで育った子どもたちは どんな未来をつくるのか

——では、森のようちえんで育った子どもたちが社会に出ていった時、どんな未来をつくっていくと思いますか。

(内田) やっぱり、お互いが協調していけるような社会を求めるんじゃないかなと思います。そのための対話とか会話を、諦めないでやっていく人たちが増えていけば、自ずと「みんながどうしたらいいか」という結論に近づいていくんじゃないかなと思うんです。結局、みんなが幸せになるためにはどうしたらいいか、ということですね。単に欲だけで争うようなことは避ける方向へ向かうんじゃないかなと思います。

今はグローバル経済の価値観が強くなっていますけれど、経済の本来の意味を考えると、経世済民、つまり国を治めて民を救うことだったり、エコノミーという言葉の語源も「家の運営」だったりする。もともとはすごく身近な単位の話なんです。今のように利益を上げて競争で勝つことばかりが経済じゃない。本来は、助け合うということが根本にあるんだと思います。

だから、グローバル経済一辺倒ではなくて、もっと身近な地域で助け合うという経済の本質を取り戻していく方向へ、これから社会は少しずつ動いていくんじゃないかなと思うんです。競争するんじゃなくて、助け合う。その価値観を本当に分かった人が増えていけば、平和な社会に近づいていくんじゃないかなと思います。

(佐々木) 三方よし、という言葉がありますよね。あれって、自分以外の社会や他者にとって、本当に何が必要なのかを想像することでもあると思うんです。そういった感覚が経済の原理にも本来は関わっていた。でも今は、数字をやり取りするゲームみたいになってしまっているところがある。だから、森のようちえんで育った子どもたちなら、「これって何かおかしいな」と気づけるんじゃないかなと思うんです。

そのうえで、対話をして、みんなが幸せになるにはどうしたらいいのかを考える。すみ分けをするのかもしれないし、融和していくのかもしれないし、方法はいろいろあると思うけれど、いずれにしても、対話を諦めないということがすごく大事なんだと思います。森のようちえんでの体験は、そういう力につながっていくんじゃないかなと思います。

(内田) そうですね。結局、どちらが正しいか、どちらが得か、どちらが儲かるか、そういう話だけで動いてしまうと、対立の構造に入ってしまう。でも、そうじゃなく、みんなにとって本当によりよいものは何か、どうしたら一緒に生きていけるかを考える。その方向へ進める人たちが増えていけば、社会は変わっていくんじゃないかなと思います。森のようちえんで育つ子どもたちには、そういう未来をつくる側に立ってほしいですね。

20年をふりかえり、次の一步へ

20年をふりかえる対談でありながら、お二人の話は、単なる回顧にはとどまりませんでした。森のようちえんが大切にしてきたのは、子どもを主体に置くこと、自然の中で体験し、自ら考え、対話しながら育っていくことでした。その積み重ねが、非認知能力や、生きる力、そして社会をつくる力につながっていくのということが、改めて確かめられました。

その一方で、次の時代を見据えた時、学びの場だけでは足りず、その先にある社会や仕事のあり方まで視野に入れなければならないことも語られました。これからの社会に必要なのは対立ではなく接点をつくり、助け合いながら、みんなにとってよりよい未来を考え続けられる人たちです。森のようちえんで育つ子どもたちには、まさにそうした未来の担い手になってほしいという願いが、お二人の言葉の底に流れていました。

20年の歩みの先にある次の長野では、こうした願いや問いを、さらに社会へと開いていくことが期待されます。森のようちえんが育んできた学びが、これからの時代にどんな価値を持つのか。その問いを携えながら、次の一步へ向かう対談となりました。



「いいことしているのに選ばれない」を変えるー教育現場のための伝える力と仕組みの話

ふたき草 代表 伊藤 俊輔 氏



伊藤 俊輔 氏

講義の冒頭では、参加にあたってのグランドルールが共有され、参加者は本講義を通して得たい情報や知識を意識しながら学びを深めました。講義全体も、テーマである「伝える」を意識した構成で進められました。

はじめに、「なぜ伝わらないのか」が取り上げられました。人は「質の高い体験を提供すれば、いずれ伝える」と考えがちですが、それは幻想であり、どれほど素晴らしい活動でも、伝え方を誤れば相手には届きません。人は自分に必要な情報しか受け取らず、発信側の意図と受け手の関心とのずれも、伝わらない要因として示されました。そのうえで、対象を設定したPR文を考え、グループで意見交換を行いました。

続いて、教育現場では「課題解決型広報」が有効であり、現実にある課題を把握し、その解決策を示す形で伝えることが大切だと語られました。

また、「伝える技術」の前提は「相手の悩みを知ること」にあると強調されました。「誰にでも伝える」は「誰にも伝わらない」メッセージになりやすいこと、「人はドリルではなく、穴を求めている」という言葉も紹介され、相手の真の目的を理解する重要性が示されました。参加者にとって、「伝える」ことを実践的な技術として捉え直す機会となりました。



子どもと自然の未来を守る！全国指導者のためのLeave No Trace実践講座

(公財)社会教育協会ひの社会教育センター 井上 恵里 氏

LNTJ 代表理事 岡村 泰斗 氏



井上 恵里 氏



岡村 泰斗 氏

本分科会では、「Leave No Trace」をもとに、自然環境への影響を最小限に抑えながら活動するための考え方と実践について学びました。「Leave No Trace」は「痕跡を残さない」と訳されますが、森のようちえんの活動フィールドでもある自然環境が、次の世代に、さらに次の世代にもあり続けるように、人と自然の持続可能な関係を目指す考え方として紹介されました。

講座では、シンプルでどこでも使える行動指針であること、意識して行動することで自然への影響を減らせること、環境的エビデンスに支えられたテクニックがあることが共有されました。あわせて、事前の計画と準備、影響の少ない場所での活動、ゴミの適切な処理、見たものはそのままにすること、最小限のたき火の影響、野生動物の尊重、他のビジターへの配慮という7つの原則についても紹介されました。また、2つのワークショップを通して、自然環境への影響を最小限にするための意識とテクニックを実践的に学びました。

子どもたちは物事の善し悪しを周囲の大人の背中や行動から学んでいるからこそ、大人自身が「Leave No Trace」を学び伝え合い、行動を変えていくことの大切さが共有されました。



馬との共生が保育にもたらすもの ― 森のようちえんが動物に惹かれる理由を解きほぐす

社会福祉法人陽だまり 井上 亘 氏
一般社団法人三陸駒舎 黍原 豊 氏

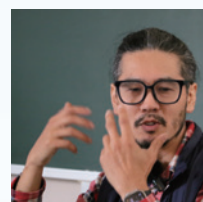


井上 亘 氏



黍原 豊 氏

本分科会では、井上亘さんと黍原豊さんの実践をもとに、馬が保育の構造にどのような影響を与えるのかが共有されました。井上さんは、里山の暮らしを保育に取り入れる中で、馬の世話や乗馬、馬術を含む日常的な関わりが、子どもの行動の確かさにつながっていくことを示しました。黍原さんは、築百年の古民家で馬と暮らしながら活動する実践を紹介し、馬との関係が子ども、大人、地域の動線や役割分担を変えていくことを語りました。両者に共通していたのは、馬が単なる体験素材ではなく、「場の在り方を変える要素」として作用している点でした。



また、参加者からは「大人はどのように変化するか」という問いが出されました。これに対し、馬との関わりは子どもだけでなく大人の行動様式にも影響し、姿勢や距離の取り方を調整する中で、判断や身体の使い方も変わっていくことが示されました。井上さんから、日常の関係性が積み重なることで、馬の側も人や子どもの動きを読み取り、応じ方を変えていくことが紹介されました。こうした変化は情緒的な結びつきとしてではなく、馬の体格や反応の大きさに人が向き合うことで判断基準が変わる、生活の中の現象として語られました。馬は特別プログラムとして後から加わる存在ではなく、人と馬が互いに変化し、その相互作用が場全体に波及する構造そのものとして位置づけられることを学ぶ分科会となりました。

廃園公立園の民営化再生と自然保育

有限会社ネイチャーセンター 代表 内田 幸一 氏



内田 幸一 氏

本分科会では、少子化によって公立保育園の定員割れや廃園、統廃合が進む中で、民営化や認定こども園化による再生と自然保育の可能性について学びました。内田幸一さんは、民営化によって自治体の運営費負担が軽減され、認定こども園化によって広域から園児を募集できることから、安定した運営につながると語りました。また、「森のようちえん」型の自然保育は、移住促進や地域活性化にも寄与することが示されました。



事例として紹介された長野県茅野市の「野あそび保育ささはら」は、公立園の廃園危機を民営化によって再生させた実践です。定員を上回る園児が集まり、職員体制も充実し、地域住民との交流の復活や移住者の増加にもつながっていることが報告されました。自然の中での主体的な遊びを重視しながら、保育者が意図的に学びの機会をつくることで、子どもの思考力や表現力を育てている点も紹介されました。

また、職員配置を手厚くし、持ち帰り仕事をなくす体制や、お泊まり保育後の休暇制度、内部研修などを通して、職員の意欲向上と理念の継承を支えていることも語られました。保護者との関係づくりにおいても、「1日保育士体験」などを通して無理のない参加と協働の子育てを実現していることが示されました。地域の廃園再生を、持続可能な保育拠点づくりへとつなげる視点を学ぶ分科会となりました。

「森のようちえん」の次の学び場「とさ自由学校」での学びとは？

学校法人日吉学園 とさ自由学校

浦林 遼 氏



浦林 遼 氏

本分科会では、とさ自由学校が掲げる「自ら学び、自ら成長する力があふれ出す教育」という理念と、その具体的な実践について学びました。とさ自由学校は、豊かな自然に囲まれた環境の中で異年齢によるクラス編成を行い、子どもたち自身がクラス名を決めるなど、自主性を尊重する文化を大切にしています。



教育の柱として「個性・多様性の尊重」「自己決定」「体験学習」が示され、学びの主体はあくまで子どもであるという考え方が共有されました。

また、実践例として紹介されたプロジェクト型探究学習「グループタイム（GL）」では、子どもたちの興味や関心を起点に学びが展開されていました。「いかだでの川下り」では、「乗り物を作りたい」という声から、いかだの設計や製作、安全計画の立案へと学びが広がり、最終的には約6kmの川下りを実現したことが紹介されました。この過程では、算数や理科といった教科学習が自然に結びつき、協働を通して仲間意識や責任感、自己肯定感も育まれていったことが語られました。子どもが自ら考え、学びを創造していく教育の大切さと、教員には「教える立場」から「学びを支える立場」への意識の転換が求められることを学ぶ分科会となりました。

VUCAの時代のヒントは、ウェルビーイングな自然保育にある

森のようちえん ウィズ・ナチュラ 代表 岡本 麻友子 氏



岡本 麻友子 氏

VUCA時代とは、変動性・不確実性・複雑性・曖昧性が高まり、未来を予測しにくい現代社会を指します。こうした時代に必要なのは「ウェルビーイングな保育」とであると語られました。ウェルビーイングとは、心・体・社会的に良好な状態にあり、持続的な幸福感をもつことを意味します。子どもの幸福を育むには、自己実現と成長、つながりと感謝、



前向きさと楽観、自分らしさを支えることが大切です。自然保育は、自然の中での体験を重視するだけでなく、人と人との自然な関係や生き方を尊ぶものです。子どものありのままを受け止め、見守る大人の姿勢が、共感を生み、信頼関係を育てます。自然保育とは方法ではなく「在り方」であり、自分らしく在ることが、持続可能な幸福の基盤になると示されました。また、周囲の大人のウェルビーイングは子どもに直接影響するため、保護者や保育者自身の幸福も大切にする必要があります。

「どんな大人になってほしいか」は、「自分がどうありたいか」とつながっているという言葉も印象的でした。

VUCA時代を生き抜くためには、変化への柔軟性、学び直しの姿勢、そして他者との共感力が不可欠です。森のようちえんでは、自然との関わりを通して、自分と他者、社会とのつながりを体感し、変化に適応する力を育みます。大人も子どもも、自分と他者の幸福がともに満たされる「自利利他円満」の心を育てることができるといふ点も、大切な視点として共有されました。

30年自然保育と関わり学んだこと、今後大事にしたいこと

森のたんけんたい 小林 直美 氏



小林 直美 氏

本分科会では、小林直美さんが30年にわたり自然保育と関わる中で学んだこと、今後大事にしたいことが語られました。

自然は子どもにとっての先生であり、子どもは興味のあるものを自ら選びながら遊びます。自然の中には、不思議、感動、おもしろさ、命をいただくこと、わくわく、不快さ、こわさ、心地よさ、美しさなど、心が動く体験があふれており、それらは深く記憶に残るものであることが示されました。まさに、それは「センス・オブ・ワンダー」につながる体験であり、自然の中で心が動くことそのものの大切さが語られました。

また、幼児期に自然の中で自然の一部として生きる体験は、人が今後幸せに生きていくうえで大きな意味をもつと語られました。自然の中で育つ子どもは、地球の危機を自分事として捉えやすく、共生の感覚を育んでいきます。AI時代には、経験でしか積み重ねられない知恵や、対人的能力、組織的能力がますます重要になることも示され、見守る保育とは、子どもが自ら考え、試し、失敗しながら学ぶ過程を大切に、必要なときに適切な援助を行う保育であることが共有されました。自然からもらうもの、子どもからもらうもの、仲間からもらうものの豊かさに触れながら、物語の続きを紡いでいくことの大切さを学ぶ分科会となりました。



スライドショー 森からのまなざし

ぐうたら村 共同代表 小西 貴士 氏



小西 貴士 氏

本分科会では、写真家・環境教育者である小西貴士さんが、スライドショーを通して「人という生き物」を見つめ直す視点を共有しました。人は個体としては弱く、群れて支え合うことで生き延びてきた存在であり、近代の便利さや効率のよさを追い求める中で、本来の人間らしさを失いつつあるのではないかと問いかけられました。小西さんは、もう一度、本来の人という生き物に近い「近代以前の体」を知り直す必要があると語りました。

また、今年9月に訪れた、文字を持たないベトナム国境の少数民族・黒モン族の暮らしも紹介されました。自然との関わりや日常生活、読み書きができなくとも豊かに語る人々の姿から、言葉は頭の中で組み立てられるものではなく、身体が生み出しているものであることが示唆されました。教育や保育の現場においても、言葉や理屈に偏りすぎず、「人という生き物」として子どもに向き合う視点の大切さが語られました。

スライドショーでは、森や川、子どもたちのまなざし、動植物の一瞬が映し出され、命が響き合い、分かち合う時間の尊さが静かに伝わってきました。論理では測れない生命のつながりに触れながら、子どもたちが世界と関わり、体と体が響き合う関係の中で育つことの尊さをあらためて考える時間となりました。





わらべうた遊びと子どもの育ち

奥州わらべうた遊びの会 郷右近 博美 氏



郷右近 博美 氏

本分科会では、「わらべうた」について、実際に歌い、触れ合いながら学びました。人形を使った進行や参加者とのやり取りの中で、温かな雰囲気のもとに会が進められ、保育現場でわらべうたを取り入れている実践動画も紹介されました。わらべうたは、どこの誰ともわからない人々が歌い出し、口伝えで広がりながら、地域ごとに節や歌詞を変えつつ伝えられてきた伝承文化です。



「おてらのおしょうさん」「なべなべそこぬけ」「かごめかごめ」などが代表例として挙げられました。わらべうた遊びには、道具を介さず、大人と子ども、子ども同士が直接向き合い、触れ合いながら心と体で関わる遊びが多くあり、特に大人と子どもが1対1で向き合って遊ぶことは、幼児期の精神発達の基盤をつくる重要な関わりであり、学問的にもその有効性が示されていると紹介されました。

また、遠野地方独自の「わらべ唄」という人育てのプログラムについても紹介されました。わらべうたは、単なる遊びではなく「心と体、人と人を豊かに結ぶ伝承文化」として継承していく価値があることを学ぶ分科会となりました。

100年先を見つめる保育園プロジェクト ～地域とのつながりからはじめよう～

NPO法人もあなキッズ自然楽校 関山 隆一 氏
特定非営利活動法人Akitaコドモの森 小玉 朋子 氏



関山 隆一 氏



小玉 朋子 氏

本分科会では、地域とのつながりを土台に、100年先の子どもの未来を見据えた保育のあり方について学びました。関山隆一さんは、ニュージーランドで学んだ“センス・オブ・ワンダー”の精神をもとに始めた活動が広がり、現在は地域の人々とともに子どもを見守りながら、環境と保育を結ぶ実践を展開していることを紹介しました。



そして、30年後に子どもたちが社会の中心を担うことを見据え、今の大人が未来のために動く必要があると語りました。食・衣・住・エネルギー・消費のすべてを地域とつなげ、オーガニック給食や地域木材の活用など、保育のあらゆる面に環境配慮とフェアな選択を取り入れている実践も共有されました。

また、小玉朋子さんは、食を通じた取り組みを中心に発表し、野外活動やオーガニック給食を通して「食べる・出す・遊ぶ・寝る」という基本習慣を大切にしていることを紹介しました。保護者の食への関心を高めるため、体験を通して巻き込みながら横のつながりをつくり「美味しい!楽しい!」から食への興味に繋がる。そこから文化の伝承や木育、暮らしの変化へと、全てが繋がっていると語られました。「やれない理由」ではなく「どうすればできるか」を考え、地域の資源と人の力を結ぶことで、新しい保育のかたちを切り開いていく視点を学ぶ分科会となりました。

組織論から考える森のようちえんの安全管理

札幌大谷大学短期大学部 田中 住幸 氏



田中 住幸 氏

本分科会では、長時間の屋外保育を行う森のようちえんの安全管理について、連盟加盟園への調査と実践事例をもとに学びました。

田中住幸さんは、病院を受診するけがが約6割の園で発生していること、またヒヤリハットについても多くの園で共有の仕組みがあることを示しました。一方で、約9割の園でマニュアルが整備されているものの、

その内容は事故発生後の連絡や通報手順に偏り、「予防的視点(事前計画)」が不足する傾向にあることが指摘されました。

また、実践事例として、全スタッフが共通の救急キットを携行し、ホイッスルやカードを活用して緊急時に備える園や、夏・冬の安全講習会を定期的に行き、子どもや保護者も巻き込んで安全点検を行う園が紹介されました。そこでは、安全の「物差しを揃えるより、お互いに理解する」という姿勢も大切にされていました。子どもが環境に慣れたときこそ、大人の気づきを伝え、子ども自身が危険を察知し、考える機会をつくることが重要であるという視点も共有されました。

安全は、マニュアルというハード面だけで支えられるものではなく、組織の文化や人間関係といったソフト面によって支えられていることを学ぶ分科会となりました。



森のようちえんとは

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟 監事 中能 孝則 氏



中能 孝則 氏

本分科会では、現代社会における子どもの成長課題と、自然体験活動を通して育まれる「生きる力」について学びました。中能孝則さんは、便利で安全な社会の中で、子どもたちが「危ないから」「かわいそうだから」と過度に守られ、挑戦や失敗の機会を失っていると指摘しました。その結果、自分の力で道を切り拓く体験が不足し、「全力を出すスイッチ」を入れる機会も失われていると語られました。

また、教育においては「認知的能力」と「非認知的能力」の両方が重要であり、特に非認知的能力は、自分で考え、想像し行動し、困難に立ち向かう力として、自然体験を通して育まれることが示されました。森遊びは、AIには再現できない「直感力」や「感性」、「自己決定力」を育て、自分のありのままの姿を見つめる機会にもなると語られました。擦り傷や失敗といった小さな経験も、命や他者への思いやりを学ぶ大切な機会として捉えられていました。

森の中での遊びや活動は、自己決定、責任感、他者理解、引き返す勇気、困難を乗り越える力といった、生きるための基礎的な力を育みます。子育ての基本は、大人自身がどう生きるかを子どもに見せることにあるという言葉とともに、自然の中で生きることの喜びを実感する経験の大切さをあらためて考える分科会となりました。



日々の中に「冒険」がある！

～子どもの力を信じるまなざしと、冒険教育からのヒント～

公益財団法人 日本アウトワードバウンド協会 長野校校長

梶谷 耕一 氏



梶谷 耕一 氏

本分科会では、冒険教育の体験を通して、「体験から学ぶ」ことの意味を学びました。梶谷耕一さんは、参加者が実際にミニ体験を行い、その後ふりかえりを重ねることで、「冒険をすると人間は成長する」ということを実感できるよう講座を進めました。心のプロセスを分かち合う時間では、自分の考えに気づくことや、人の気持ちを聞くことの意味を体験的に考える機会となりました。また、講座では「エッジワークモデル」「体験学習のサイクル」「概念学習と体験学習」という三つの考え方が紹介されました。安心安全な場所から一歩踏み出すストレッチゾーンに身を置くことで人は成長すること、体験し、ふりかえり、気づき、試してみる循環の中で学びが深まることが示されました。体験学習の最終的なゴールは、自分の価値観やあり方を知ることにあるとも語られました。



さらに、アウトワードバウンドの実践を通して、自然や仲間との関わりの中で心が揺れ、その揺れの中で子どもたちが自分で選び、自分で決め、自分や他者、自然、家族、コミュニティについてふりかえることの大切さが共有されました。

日々の活動の中で危険をどう管理するかについても触れられ、組織や保護者、指導者の価値観や関係性、信頼、安全管理の力が重要であることを学ぶ分科会となりました。

生命との出会い方（いのちとの出会いかた）

やまのこ保育園 副園長 柏木 拓人 氏



柏木 拓人 氏

本分科会では、子どもたちが生き物とどのように出会い、関わりながら「生命」を感じているのかについて学びました。

柏木拓人さんは、子どもたちがカエルに出会ったとき、こわがりながらも触れようしたり、口や筋肉を確かめたりする姿を通して、一見残酷に見える関わりの中にも、生き物とはどういうものかを知ろうとする探究があることを示しました。また、死んだ生き物をめぐる子どもたちの会話からは、「埋める」「お墓をつくる」といった経験を重ねながら、死についてもそれぞれに考えている様子が伝わってきました。



やまのこ保育園では、死んだ生き物がしばらく下駄箱に置かれている姿をきっかけに、命との向き合い方をより深く考えるため保護者と語り合う「おしゃべりナイト」にも取り組んでいることが紹介されました。分科会では参加者同士のグループトークも行われ、「可哀想」という言葉で命を片付けてよいのか、子どもたちはその言葉をどう受け止めているのかなど、多様な意見が交わされました。柏木さんは、大人も子どもも死を体験したことがないからこそ、同じ目線で同じテーマを考えられると語りました。答えがないからこそ、子どもたちとともに命を考えることの深さを学ぶ分科会となりました。

動物園で自然体験のアフタースクール！ ～森のようちえん以後の子どもの居場所～

札幌まるやま自然学校 小杉 生奈子 氏



小杉 生奈子 氏

本分科会では、放課後自然体験活動「ここいく」の実践を通して、森のようちえん以後の子どもの居場所づくりについて学びました。

小杉生奈子さんは、札幌中心部に近い円山地区の自然環境と円山動物園を拠点に、小学生が放課後に継続して自然と関わる場をつくっていることを紹介しました。活動では、春の花摘みや登山、夏の川遊びや昆虫採集、秋の果実や木の実の収穫、冬の雪遊びやかまくら作りなど、四季を通して多様な体験が行われています。

また、「ここいく」は、もともと特別な支援を要する子どもの居場所として始まり、その後、学校になじみにくい子や転校生、森のようちえん出身の子どもたちも多く参加するようになったことが語られました。異年齢での遊びや他者との関わりが少なくなっている現代の子どもたちにとって、小集団の中で自由に遊び、自然と出会う時間が、自発性や安心感を育てる場になっていることが示されました。

さらに、放課後は子どもが自ら過ごし方を選べる貴重な時間であり、「遊ぶ・休む権利」を保障する大人の姿勢が重要であることも共有されました。保護者も活動に関わることで、子どもの新たな一面を知り、ともに成長していることが紹介され、自然を軸とした放課後の居場所づくりの可能性を学ぶ分科会となりました。



幼児教育と学校教育の学びのつながりを考えよう

森のこども園てくてく 園長 小菅 江美 氏



小菅 江美 氏

本分科会では、幼児教育と学校教育の学びのつながりについて考えました。小菅江美さんは、以前は小学校側が「〇〇ができるようにしてほしい」と求め、保育の現場がそれに応える流れが強かったものの、話し合いを重ねる中で、今は保育と教育について互いに語り合う雰囲気になってきたと語りました。そこで、教員に保育の現場を見てもらい、その活動の中にどのような学びがあるのかを考えてもらう取り組みが紹介されました。情報シートを読み込み、実際の姿と重ねて見ることで、子ども理解が深まり、保育者の視点が小学校教師の見方を変えていくこと、何より子ども観の共有が大切であることが示されました。

また、映像資料として、大きな石を火にくべて焼き、水をかけ、ひび割れた石をたたいて断面を観察する子どもたちの姿が紹介されました。大人はそこにさまざまな学びを見いだしますが、子どもはシンプルに「なんで？もっと知りたい」と反応します。その気持ちこそが大切であり、学校で知識を得たときに、実感と感動を伴う学びにつながっていくことが語られました。

不登校やフリースクールの話題にも触れながら、誰一人取り残さないインクルーシブな学びを追求していく視点を学ぶ分科会となりました。



こどももおとなも幸せになる自然保育のススメ

山の遊び舎 はらぺこ 小林 成親 氏



小林 成親 氏

本分科会では、小林成親さんを座長に、沼倉幸子さん、岡本麻友子さん、山口美和さんが、それぞれの立場から「自然保育」について語りました。小林さんは、すべての子どもたちが幸せであってほしいという願いのもと、「ちゃんと遊びこみ、お腹を空かせ、しっかりねようぜ」を大切にしてきたと話しました。そうした保育の積み重ねによって、子どもだけでなく、親や祖父母も変わり、保育に関わるようになっていったことが紹介されました。



また、山口さんからは、自治体によっては自然保育への支援が広がり、一般の園でも自然保育に取り組む動きが増えていることや、認証制度を取得した後に子どもの自主性が育ってきているという見解が共有されました。一方で、虫や毒などの危険面には、なお大きな課題があることも示されました。岡本さんは、自然保育は「やり方」ではなく「あり方」であり、園を訪ねる中で、保育者自身の幸せにもつながっていると感じていると語りました。沼倉さんからは、認証を受けていることで自治体とつながりやすくなることや、夏の危険などに向き合いながらも、「どうしたらできるか」という視点をもつことの大切さが示されました。一般園であっても森のようちえんであっても、子どもの幸せを願う思いは同じであり、自然の中で心が揺れ、不思議に触れる体験の大切さをあらためて考える分科会となりました。

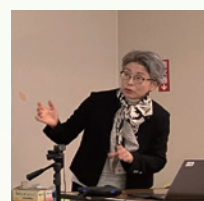
森のようちえんと Resilience

社団法人 私と出会う森 チャン・ヒ・ズン 氏



チャン・ヒ・ズン 氏

本分科会では、これからの時代を生きる子どもたちに必要な「Resilience(困難を乗り越える力)」について学びました。チャン・ヒ・ズンさんは、講話の冒頭で、持病を抱えながらも受け取る人を思っ一つひとつ石に顔を描く方の話を紹介し、その姿こそがResilienceを体現していると語りました。AIや気候変動、マスメディアなど、子どもたちを取り巻く危険が増えていく今、席に座って教科書を開く授業だけではResilienceは身につかず、自然の中で過ごすことがとても重要になると話されました。森の中では思ってもいなかったことが起こります。そのときに「どうすればよいか」と考え、乗り越える経験が、自信や粘り強さ、その子自身の強さにつながっていくことが示されました。



また、日本は地震をはじめとするさまざまな災害を経験する中で、そのたびに立ち上がり、乗り越え、よりよいものをつくってきた国であり、Resilienceの強さを世界が学ぼうとしていることも紹介されました。子どもたちが大人になるころには、今よりもさらに多くの危険が増え、どのような社会になっているかわかりません。だからこそ、森のようちえんだけでなく、子ども自身が自分のやりたいことを感じ取り、自分で選択していけるように育てていくことが大人の役目であること、そして大人が悩み、努力する姿そのものが、子どもたちの未来へのプレゼントになることを学ぶ分科会となりました。

発達がゆっくりな子と過ごす野外保育の事例

NPO 法人青空たけの子 代表理事 辺見 妙子 氏



辺見 妙子 氏

本分科会では、発達がゆっくりな子と過ごす野外保育の事例をもとに、その子を丸ごと受け止める保育について学びました。辺見妙子さんは、青空保育たけの子の保育内容を紹介したうえで、Aちゃんの「学びの物語」をもとに、育ちの過程で生まれる課題を参加者とともに考えるワークショップを行いました。「でかけたがらないとき」「着替えたがらないとき」「いうことを聞いてくれないとき」などの場面について話し合い、友達から誘ってもらい、別行動にする、自分から着替えたいと思うまで待つ、その子の気持ちを尊重するなど、さまざまな意見が出されました。



また、同じ年齢の子と比べると成長がゆっくりだったAちゃんも、少しずつできることが増え、自ら着替えたり、友達と同じことをしようとする姿が見られるようになったことが共有されました。Aちゃんの詩や、風景構成法で描かれた年長児の絵の変化も紹介され、その子の内面にある豊かな感性や育ちを見つめることの大切さが伝わってきました。最後には、保護者に伝えるときの関わり方についても話し合われました。発達について伝えることは、保育者と保護者の関係性に大きく影響するため、「これから一緒に育てていきましょう」という姿勢で向き合うことの大切さが共有されました。発達がゆっくりな子を受け入れる社会であってほしいという願いとともに、その子自身をゆったりと見守る視点を学ぶ分科会となりました。

食から未来を創る!食で変わる子どもの心と体・八世代先までの命の紡ぎ・持続可能な健康長寿社会の実現のために(前編)

株式会社ギフトッド 代表取締役 前島 由美 氏

食育心理® 研究所代表 国光 美佳 氏

東京科学大学 安達 貴弘 氏



国光 美佳 氏



前島 由美氏



安達 貴弘 氏

本分科会では、子どもたちの心と体、そして社会の未来を支える「食」の重要性について学びました。前島由美さんは、自身の保育施設で発達障害のある子どもを受け入れたことをきっかけに、国光美佳さんの著書『食べなきゃ危険!食卓はミネラル不足』と出会い、ミネラル食の実践に取り組むようになったと語りました。その結果、子どもたちの精神が落ち着き、コミュニケーションが取りやすくなるなどの変化が見られたことから、食の改善が子どもの育ちに大きく関わることを実感したといいます。また、現代の食の課題として、スーパーやコンビニで手に入る安価で便利な食事は、栄養価の面で十分とは言えず、ミネラル不足が子どもの発達や心身の状態に影響を及ぼす可能性があることが示されました。ミネラルが不足すると、脳内で神経伝達物質が作られにくくなり、神経伝達にも影響が出ることを紹介され、ミネラル食やオーガニック食を見直す必要性が語られました。さらに、韓国での給食のオーガニック化や、日本でのフーズ・フォー・チルドレンの活動、2023年に始まった「医食同源米による我が国の国難を解決するコンソーシアム」などの取り組みも紹介されました。



食を見直すことは、子どもの健康だけでなく、医療費の軽減や健康寿命の延伸、農業や地域社会の未来にもつながるという視点が共有され、持続可能な健康長寿社会の実現に向けて、食のあり方をあらためて考える分科会となりました。

頭は面白いことを考えるためにだけ使えばいい

森のようちえん ぴっばら 松下おとじろう 氏



松下 おとじろう 氏

本分科会では、松下おとじろうさんによる手づくりの紙芝居を通して、「面白がること」の豊かさに触れました。名刺代わりとして披露された紙芝居は、物語や絵だけでなく、音楽や仕掛けまですべて手づくりで構成されており、参加者は最初から強く引き込まれました。紙芝居の中では、登場するキャラクターや背景が棒や紐によって生き物のように動き出し、紙の上の世界が、今ここで生きているもののように感じられました。物語に合わせて音楽が切り替わる演出も加わり、会場全体が想像力に満ちた空間へと変わっていきました。



また、松下さんは、反応がほしいときに頭に手を当てるしぐさを用いながら、参加者とのやり取りも楽しんでいました。その姿からは、表現することと人をつながることを、ともに楽しむ姿勢が伝わってきました。質疑応答では、紙芝居づくりには時間がかかるものの、着想を得れば一気に形になることが語られ、作品の背景にある丁寧な積み重ねもうかがえました。

本分科会は、楽しさは特別なところにあるのではなく、日々の中にあること、そして頭は面白いことを考えるために使えばよいのだという講師の思いに触れる時間となりました。子どもにも大人にも、心が動く楽しい体験の大切さをあらためて感じる分科会となりました。

世界と出会う「感覚」という扉を開く

NPO法人 森のころね 松山 道子 氏



松山 道子 氏

本分科会では、「感覚」を通して世界と出会うことの大切さについて学びました。松山道子さんは、五味太郎『質問絵本』を用いた絵本セラーピーから講座を始め、一つの出来事に対して人それぞれ感じ方が異なることを体験的に共有しました。その中で、「私」と「あなた」は違っていてもよく、その違いを受け入れることの豊かさが参加者の間に穏やかに広がっていきました。



また、ルドルフ・シュタイナーの「感覚とは世界と出会う唯一の扉である」という言葉をもとに、自分の身体を通して世界を感じるの意味が語られました。大人はつい頭で考えがちですが、五感を通して“今ここ”にある自分を感じることで、心がほどけ、内側の静けさと向き合うことができることが示されました。子どもたちを理解するためには、まず大人自身が自分の感覚に気づき、取り戻すことが必要であるという視点も印象的でした。

さらに、触覚・平衡感覚・固有受容感覚という三つの基礎感覚が、情緒や学び、そして社会性の土台になることが紹介されました。わらべうたやくすぐり遊び、ブランコ、登る・運ぶといった身体を使う活動が、心身の安定や自己認識の発達に深く関わっていることを学び、子どもと関わる日々の見方をあらためて見つめ直す分科会となりました。

目から鱗のアイデア！

これからの選ばれる魅力ある園づくりと運営継続を考える

大沼流山牧場 宮本 英樹 氏



宮本 英樹 氏

本分科会では、少子化が進む中で、これからの園づくりと運営継続をどのように考えるかについて学びました。宮本英樹さんは、まず自分たちの地域で子どもの数がどう変化しているのかを正確に把握し、「マーケットを把握する」視点が欠かせないと語りました。そのうえで、森のようちえんだけにこだわるのではなく、地域の資源を束ねながら、子どもと暮らしを地域全体で支えていく発想が必要であることを、自身の実践を交えて紹介しました。



また、中盤では人参の食べ比べワークが行われ、有機栽培と慣行栽培の二種類の人参を味わい、「本来の野菜の味」とは何かを考える時間が設けられました。宮本さんは、子どもたちに“本物の味”を経験させることも、園の大事な役割の一つであると語りました。

終盤には、「あなたにとって森のようちえんは、目的ですか？ 手段ですか？」という問いが投げかけられました。森のようちえんという名前に縛られるのではなく、自分たちのミッションに合う手段をいくつも持つこと、少ない子どもだからこそ丁寧に関わられる強みを生かし、地域とともに価値をつくっていくことの重要性が示されました。運営の話でありながら、子どもの育ちと地域の未来をあわせて考える分科会となりました。

母が立ち上げた森のようちえんのあれこれ

野外保育とよた森のたまご 遊佐 美絵 氏
森のようちえん こそあどの森 塚本 絵美 氏



遊佐 美絵 氏



塚本 絵美 氏

本分科会では、母親として森のようちえんを立ち上げ、運営してきた二人の実践を通して、子どもを預かるだけでなく「母が関わる」ことの大切さについて学びました。お二人に共通していたのは、保育の実践を日々の暮らしや子育てにも生かしてほしいという願いでした。他の家庭の子育てに触れることで、「こんな言い方や関わり方もある」と気づき、



多様な価値観に出会える共同の子育て環境が生まれていることが語られました。「こどもの世界を共感してほしい」という言葉も印象的でした。また、「我が子のことを考えて立ち上げた」という活動の原点や、妊娠・出産という大きな出来事を経験しながらも活動を続けてきた歩みが紹介され、その姿が参加者にとって大きな励みとなっていました。県内の近隣団体同士で合同の年長交流活動を行っていることも共有され、一緒に遊べる人数が増えることで遊びの幅が広がり、年長らしい有用感を味わえることが伝えられました。また、「一人ひとりの子をちゃんと見ていたら、ガミガミ怒ることもなくなる。発達のことを理解できていたら、そんなに言うこともない」という言葉も紹介されました。発達理解とは、子ども同士を比べるためではなく、その子を焦らず、ゆったり見守ることにつながるのだと感じられる内容でした。母親という共通の立場の参加者が多く、共感の中で意見交換が深まり、「一緒に子育てをしたいと思える仲間と出会いたい」という思いが強まる分科会となりました。

「Haha-mori プロジェクト」って何？

人づくりから森づくりへシフトした森のわらべの新たな挑戦

自然育児森のわらべ多治見園 浅井 智子 氏



浅井 智子 氏

本分科会では、森のわらべ多治見園の歩みをたどりながら、母と森がともに輝く社会を目指す「Haha-moriプロジェクト」について学びました。浅井智子さんは、公立幼稚園でも森のようちえん化が進む一方で、母親の子育てに対する不安や孤立感は今も大きく、母親としての喜びやアイデンティティを取り戻す場が必要だと語りました。森の中で子どもと過ごす時間は、今しかない子ども時代を親子で育ち合う大切な時間ですが、その価値が十分に伝わりにくくなっている現状への危機感も共有されました。



また、広葉樹の森の活用に取り組む「飛騨の森でクマは踊る」との出会いを通して、一本一本異なる木の個性を見極めて生かす姿勢が、子どもや母たち一人ひとりの個性を尊重する保育観と重なることに気づいたと話されました。母たちの発想には、林業の現場にはない視点があり、そこに森づくりの新たな可能性があることも示されました。

「Haha-moriプロジェクト」は、母だからこそ生まれる想像力を森づくりへとつなげ、「母」と「子」の笑顔を増やしていく取り組みとして生まれました。母たちが母であることを自分の喜びとして再び感じられる場をつくることが、森の未来にもつながっていくという視点が印象に残る分科会となりました。

私たちのナラティブツリー

～書いて、語り合って、子どもの隣へ今日もまた

社会福祉法人東香会 青山 誠 氏



青山 誠 氏

本分科会では、保育者が日々の出来事をエピソードとして書き、読み合い、語り合う「ナラティブツリー」の実践について学びました。青山誠さんは、「保育は一人じゃできない」という言葉から、記述を通して保育者同士がつながっていく営みの大切さを語りました。



印象的だったのは、園に入って間もないスタッフが、雨上がりの園庭で女の子に手を引かれ、階段を何度も上り下りした時間を記したナラティブです。泥のついた手を大げさに見せると、女の子は首を横に振り、代わりに小指をぎゅっと握る。その短いやりとりの中に、身体で交わされる信頼が丁寧に描かれていました。また、青山さんは、こうした記述は特別に書ける人だけのものではなく、感じたことや心に残った場面を「その人の言葉」で書くことに意味があると語りました。書くことは義務ではなく、読むことや応答も強制ではありません。しかし、誰かが書いた小さな声に「わかるよ」「読んだよ」という応答が重なることで、記述が枝葉のように広がっていくことが、「ナラティブツリー」という名の由来でもあると紹介されました。書くことを通して、自分の保育観が照らされ、他者の視点にも出会えること、その積み重ねが園全体の保育の土台を育てていくことを考える分科会となりました。

森のようちえんのその後？ 子どもの「卒園後」とその学びのかたち

有限会社ネイチャーセンター 代表 内田 幸一 氏
認定NPO法人よみたん自然学校 代表理事 小倉 宏樹 氏



内田 幸一 氏



小倉 宏樹 氏

本分科会では、森のようちえんの卒園後に、子どもたちの学びや育ちをどのように支えていけるのか、その先の実践について学びました。小倉宏樹さんが運営する「よみたん自然学校」では、子どもの主体性を尊重し、結果よりも過程を大切にしながら、自然体験活動や幼児の学校、フリースクールなど、多様な学びの場を展開しています。フリースクールでは、子どもたちの「やりたい」を起点に、自ら選び、試し、経験を重ねる中で、「自分軸」を育んでいくことを重視していると語られました。好きや強みを生かしながら育っていく子どもたちの姿も紹介されました。



また、内田幸一さんは、長野県で森のようちえん第1号園を立ち上げ、「信州型認定こども園」制度の創設にも関わってきた歩みを紹介しました。ネイチャーセンターでは、少子化による公立園の統廃合への対応として、認定こども園とフリースクールを併設し、子どもたちの新たな居場所を築いてきたといいます。「友学舎」では、みんなの話し合いで決まったことを守るというルールのもと、衣食住を含めた日々の暮らしそのものを自分事として捉えながら、子どもたちが仲間とともに主体的に過ごしていることが語られました。両氏の実践から、幼児期だけでなく、その先の学びの場にも「森のようちえん的環境」が必要であること、そして自然だけでなく、周囲の大人もまた子どもの育ちを支える大切な環境の一部であることが示されました。

焚火の楽しみ方とリスクマネジメント

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟 理事
笠倉 秀貴 氏



笠倉 秀貴 氏

本分科会では、焚火の楽しみ方と安全管理について、実際に火を起こしながら学びました。小雨の降る中、参加者は車座になって自己紹介を行い、和やかな雰囲気で始まりました。笠倉秀貴さんからは、焚火に大切な燃焼の三要素や薪の種類、ナタやキンドリングクラッカーなどの薪割り道具の使い方が紹介され、参加者とのやり取りを交えながら導入が進められました。



その後、参加者は四つのグループに分かれ、燃焼の三要素のバランスを意識しながら火起こしに取り組みました。試行錯誤を重ねながら、全ての班が火を起こすことに成功し、焚火のねらいに応じた薪の組み方や薪の足し方、樹種や乾燥具合による燃え方の違いなども学びました。焚火を囲んでぬれ煎餅やソフトクッキーをあぶって味わう時間もあり、体験型ならではの楽しさが共有されました。

また、講座の終盤には、焚火の終わらせ方や後片付け、マナーについてもレクチャーがありました。参加者からは、マッチを擦るときに安全管理や焼き芋の焼き方など、実践に根ざした質問も多く出され、情報交換も活発に行われました。焚火の温かさと楽しさを味わいながら、その背景にあるリスクマネジメントの大切さを具体的に学ぶ分科会となりました。

子供も喜ぶ、安心安全な食事の調理方法

株式会社亜里屋 代表取締役 金淵 貞子 氏



金淵 貞子 氏

本分科会では、発酵食品を中心にした健康的な食習慣と、安心安全な調理方法について学びました。金淵貞子さんは、前半で伝統的な「三五八漬け（塩麴）」の作り方と活用法を紹介し、冷めたご飯、麴、塩を用いて発酵させることで、野菜の和え物や肉・魚の下味にも使えることを説明しました。発芽玄米の炊き方も紹介され、白米より栄養価が高く、塩麴との相性もよいことが共有されました。また、調理器具についても、アルミ鍋を避け、ステンレスや陶器を使うなど、安全面への配慮が大切であると語られました。



後半では、ヘンプシードやかつお節を使った混ぜ込みおにぎりづくりを通して、栄養バランスと保存性を両立させる工夫が紹介されました。また、現代の食環境に潜む問題として、清涼飲料水や人工甘味料、化学添加物入りの調味料などにも注意が必要であることが取り上げられました。代わりに、ルイボスティーや天然水、天然塩、きび砂糖、りんご酢、伝統的な醤油など自然に近い素材を選ぶことの大切さが語られました。

講座全体を通して、伝統的な食文化を現代の暮らしの中に取り戻し、発酵食品や自然素材を生かした食生活を続けていくことが、体調の改善だけでなく、家族の健康を支える土台になることを考える時間となりました。

もりもりもりっとウクレレならそう！

辻山ウクレレ教室 主宰 ツジヤマガク 氏



ツジヤマガク 氏

本分科会では、ウクレレの楽しさと、その場にいる人たちの心をつなぐ力について学びました。ツジヤマガクさんは、ウクレレが小さく手軽で、比較的始めやすい楽器であることに加え、コミュニケーションツールとしても大きな魅力をもつと語りました。講座の冒頭では、ウクレレの伴奏に合わせて自己紹介が行われ、楽器の裏側に顔をつけて口を動かす工夫も加わり、視覚的にも楽しい時間が広がりました。



また、「もりのようちえんのうた」も披露されました。この曲は、第10回全国フォーラムの参加者アンケートの言葉をもとに作られたもので、季節の変化に合わせて置語が変わることや、「エイエイオー！」の掛け声が入ることなど、森のようちえんの楽しさが感じられる一曲として紹介されました。

実践では、ウクレレの基本的な構え方や弦の名前、チューニングの大切さ、コードの押さえ方が丁寧に説明されました。開放弦を鳴らすところから始め、Cコードを使って「かえるのうた」や「グーチョコキパーでなにつくろう」などを演奏しながら、少しずつ音を重ねる楽しさを味わいました。リズムを変えたり、空振りの技法を加えたりすることで、演奏そのものが人と人の心を通わせる時間になることも共有されました。音楽を通して、楽しさとつながりが自然に生まれることを感じる分科会となりました。

コミュニティ作りとしての森のようちえん ～大人たち・地域・自然とのつながりの中でこそ『育ち』

NPO 法人青空保育ぺんぺんぐさ 土井 三恵子 氏
青山学院大学 菅野 幸恵 氏



土井 三恵子 氏



菅野 幸恵 氏

本分科会では、「安心感」と「つながり」を軸に、コミュニティの中で育ち合う森のようちえんのあり方について学びました。土井三恵子さんは、制度にとらわれず約20組の親子と自主保育を行い、「お互い様」で支え合う子育てを実践していることを紹介しました。保護者が保育に参加することで園全体が変化し、子ども同士も影響し合いながら育っていくことが語られました。特に「あっくん」と「ひろくん」の関係を通して、好き嫌いや衝突を行き来しながら、よいところも難しいところも含めて受けとめ合う姿が印象的に語られました。



また、懇談会などで保育者が自分の思いを素直に言葉にすることで、保護者も安心して気持ちを打ち明けられるようになり大人たちもまた「見守られる安心感」を取り戻していったことが共有されました。菅野幸恵さんは、乳幼児期は「人としての根っこを育てる時期」であり、子どもが安心するためには、まず親が安心していることが大切だと述べました。大人同士が弱さを見せ合い、支え合う関係が、子どもの安心にもつながっていくこと、そして森のようちえんや自主保育のような「現代版共同保育」が、新しい支え合いの形になり得ることが語られました。子どもも大人も、安心してつながれる場の中でこそ育ち合えることを考える分科会となりました。

「森のムッレ教室」の紹介 —スウェーデン発祥の自然体験及び環境教育—

山五十嵐こども園 富樫 雄基 氏



富樫 雄基 氏

本分科会では、スウェーデン発祥の環境教育プログラム「森のムッレ教室」について学びました。富樫雄基さんは、アイスブレイクの手遊びで心と体をほぐしたあと、「森のムッレ」とは何か、その理念や概要を紹介しました。森の妖精ムッレや川の妖精ラクセなどの存在を通して、子どもたちが自然の大切さや楽しさに触れていくこと、また年齢別に構成された環境教育プログラムがあることが、森のようちえんとの大きな違いとして語られました。決まったプログラムがあることで、初めて森や自然に出かける子どもたちにとっても入りやすいことが共有されました。



また、講義では季節に応じたプログラムの紹介だけでなく、中庭での実践も行われました。参加者はムッレの歌を歌い、ムッレ協会独自のカップ型ルーペを使って葉っぱや石を観察しました。普段は見過ぎてしまうような細かな世界に夢になる姿が見られました。さらに、袋の中の自然物を手触りで当てて同じものを探す感覚ゲームや、「ムッレ鬼」という遊びも体験し、自然の中で遊びながら学ぶ面白さを味わいました。

森のムッレ教室は、自然に親しむ入り口としての親しみやすさと、遊びを通して環境へのまなざしを育てる工夫にあふれておりその魅力を体感できる分科会となりました。

映像記録で紐解く「学びのあしあと」

～せた森のようちえん&しょうがっこう、フリースクール「スキニシー学校」の子どもたち～

せた森のようちえん 代表 西澤 彩木 氏
スキニシー学校 理事 林 浩一郎 氏
滋賀大学 山本 一成 氏



西澤 彩木 氏



林 浩一郎 氏



山本 一成 氏

本分科会では、森のようちえんから小学校、フリースクールへと展開してきた12年間の映像記録を通して、子どもたちの「学びのあしあと」を見つめました。映像には、小屋づくりや田植え、一輪車での運搬、焚き火、ヤギとの暮らしなど、日々の実践が映し出され、そこにどのような学びがあるのかが丁寧に読み解かれました。たとえば、石や火、道具、動



物との関わりの中で、子どもたちは問いを立て、試し、失敗し、また考えながら学びを深めていました。映像は、誰に何のために見せるかによって伝わり方が変わることで、そして保護者に子どもの姿を伝える大切な媒体にもなることが語られました。

また、「スキニシー学校」の映像では、タイプの違う子どもたちが、何をしたいか、どんな名前にするかをゆっくり話し合い、失敗ややり直しも受け入れながら、言葉や身体を通してつながっていく様子が紹介されました。

焚き火の場面では、火を囲むことで自然に姿勢や関係が生まれ、火そのものが多くのことを教えてくれる存在として描かれました。幼児期には友達を誘えなかった子が、数年後には仲間の中心にいる姿や、ヤギとの暮らしの中で生まれる問いと実験、命との向き合いも映し出されました。生きること、一緒に生きること、声が聞こえなかったものたちの声に耳を澄ますことを考える分科会となりました。

おとも森のようちえん体験

一般社団法人 new education LittleTree 野村 直子 氏



野村 直子 氏

本分科会では、自然体験活動の振り返りを通して、保育における「意図（ねらい）」の大切さについて学びました。雨の中で行われたネイチャーゲームでは、雨の音や色探し、雨の感触などを通して、五感を使って自然を感じる体験が共有されました。参加者からは、普段は思考を優先しがちだが、頭で考える前にまず「感じる」ことの大切さに気づいたという声もあったといいます。こうした体験を支えるのが保育者の「意図」であり、活動に明確なねらいをもつことが保育の質につながることを語られました。



また、後半には今回の活動の振り返りを行い、「思考より感じる」「概念より実体験」「視覚に頼らない感覚」「個々の感性を引き出す」といった意図があることが紹介されました。そのうえで、「自由」は放任ではなく、安全な枠の中で安心して挑戦できることを意味すること、「主体的」と「自主的」は異なること、「一斉保育」も目的によっては有効な手立てとなることが参加者とのディスカッションで整理されました。さらに、自然体験におけるリスクマネジメントの重要性にも触れられ、危険生物の確認や衛生指導など、事前の準備が欠かせないことが共有されました。「森のようちえん」は特定の方法論ではなく、子どもの発見に寄り添い、活動を広げていく保育者の「意図」こそが実践の中心にあることを考える分科会となりました。



まおい学びのさとの食と農と子育て

NPO 法人まおい学びのさと 藤田 晋平 氏

NPO 法人まおい学びのさと 市川 竜之助 氏



藤田 晋平 氏



市川 竜之助 氏

本分科会では、食と農を通した子どもの育ちと、学童期の環境づくりについて学びました。藤田晋平さんと市川竜之助さんは、北海道の豊かな自然と地域とのつながりを生かしながら行っている実践を紹介しました。「まおいごはん」は、小学校の希望者に週2回提供される配食事業で、分づき米と煮干し・昆布だしの具だくさんの味噌汁を中心に、顔の見える安心な食材をできる限り用いていることが語られました。アレルギー対応についても、全員を除去食に統一し、誰もが安心して同じ食卓を囲めるよう工夫していることが共有されました。また、この取り組みは、農薬を使わない畑での「農活」や体験活動と結びついており、子どもの「やってみたい」という思いを大切にしながら、ごはんづくりや調理の企画も実現してきたことが紹介されました。偏食だった子が大根を好きになるなど、食を通した小さな変化も大切にされていました。



後半では、学童保育の実践にも話が広がり、森のようちえんのその先にある「子どもの参加する権利」を保障したいという願いが語られました。子どもが「安心して一人になれる」こと、「のびのび飛び出しても安心して戻ってこられる」ことを支えるために、指導者や仲間が「見てるよ、待ってるよ」という存在であり続けることの大切さが共有されました。食と農、そして子どもの自己選択を支える環境づくりを考える分科会となりました。

食から未来を創る!食で変わる子どもの心と体・八世代先までの命の紡ぎ・持続可能な健康長寿社会の実現のために(後編)

株式会社ギフテッド 代表取締役 前島 由美 氏

食育心理® 研究所代表 国光 美佳 氏

東京科学大学 安達 貴弘 氏



国光 美佳 氏

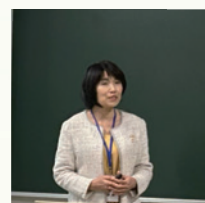


前島 由美氏



安達 貴弘 氏

本分科会では、子どもの心と体の育ちを支える食のあり方について、実践と研究の両面から学びました。国光美佳さんは、「毎日の食事」と「子どもの心」は深くつながっており、現代の食生活ではミネラル不足が大きな課題になっていると語りました。ミネラルが不足すると、セロトニンなどの神経伝達物質のはたらきにも影響が及ぶこと、また、子どもの絵の変化などを通して、食の改善によって情緒が安定し、集中力や思いやりが育っていく様子も紹介されました。改善の入り口としては、「お出汁を足す」ことから始める無理のない工夫が提案されました。



また、安達貴弘さんからは、未病の観点から食環境の大切さが語られました。腸内環境を整えることは免疫を高めることにつながり、食べたものは免疫系と神経系の両方に影響すること、日本の伝統食である米・味噌・酢の価値があらためて紹介されました。玄米食が腸内環境の改善に役立つことにも触れられ、日本の食文化の持つ力を見直す視点が共有されました。講座全体を通して、食を見直すことは子どもの健康だけでなく、次の世代へと命をつないでいく土台であり、保育の場で食文化をどう伝えていくかを考える分科会となりました。

まきば保育園のあゆみ～開園から現在まで～

まきば保育園 山口 満 氏



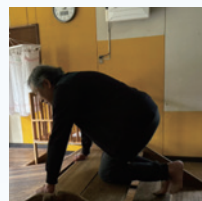
山口 満 氏

本分科会では、まきば保育園の園見学と講話を通して、自然とともにある保育の歩みを学びました。園に一步足を踏み入れると、木々や草花がそのまま息づく広大な園庭が広がり、山口満さんから、サルナシや栗、天然のキノコなど、この土地ならではの自然が紹介されました。

園内では脱プラスチックを徹底し、遊具や建具にも木材を多く用いており、「生の木」を使った建物には、木造建築の知恵が生かされていることが語られました。

また、まきば保育園では、危険を完全に排除のではなく、滑り台や柵の隙間などにあえて危険を残し、子どもが自ら察知し、体を使って安全を学ぶ機会を大切にしていることが紹介されました。保育者は必要以上に介入せず、子どもの力を信じて見守ることで、身体感覚や自立心が育まれていくといいます。

講話では、山口さん自身の歩みと保育観の変化にも触れられました。自然豊かな幼少期や消防士としての経験を経て、さくらんぼ保育園との出会いが「子どもの状態を受け入れる保育」へと考えを深める転機になったことが語られました。現代の子どもを取り巻く食生活や生活習慣の乱れにも目を向けながら、幼児期には学習よりも心と体の発達を大切に、自然とともに生きる生活リズムを取り戻すことの重要性を考える分科会となりました。



フリー分科会



フリー分科会は、参加者自身が企画・実施する公募型のセッションです。
実践や研究、問いを持ち寄りながら、学び合いと交流を深める場として行われました。

博物館の森は親子が学び育つ場 琵琶湖博物館ちこあその紹介

琵琶湖博物館特別研究員 池田勝



フリー分科会



※法人格略称・敬称略

『森のわらべ流チームビルディング』

父ちゃん&母ちゃんの持ち味が発揮できるコミュニティとは
自然育児森のわらべ多治見園 浅井智子



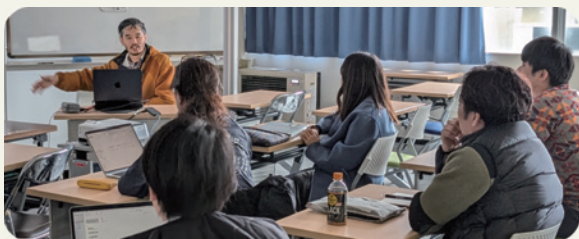
探求者としての子どもに気付く ～森の中の動きを分析してみよう～

三陸駒舎 黍原里枝



生成AIを森のようちえんで活用しよう!

三陸駒舎 黍原豊



森のようちえんウィズ・ナチュラを“食”の
眼差しから見つめた親子のこころとからだを結ぶいのちの物語
幸せな保育研究所〜Well-being Labo〜
後藤有花／福田典代／中本千尋



秋田杉のオーバルプレートづくり

Akitaコドモの森 小玉朋子



ほいくとこどもを探究する会

new education Little Tree 野村直子／久保田修平／藤江雅也



能登から来ました!

坂井理笑／中村真由美／日比美友



安全の物差しをどのように共有していますか?

Fujiこどもの家バンビーノの森 佐藤広子



体目覚めるヨガとやさしい朝ごはん

Akitaコドモの森 土田はるか／下山菜穂子



伝承のわらべうた遊びで豊かな保育・子育てを

わくわくbase亀戸 彦坂早苗



ファンドレイジングって何?

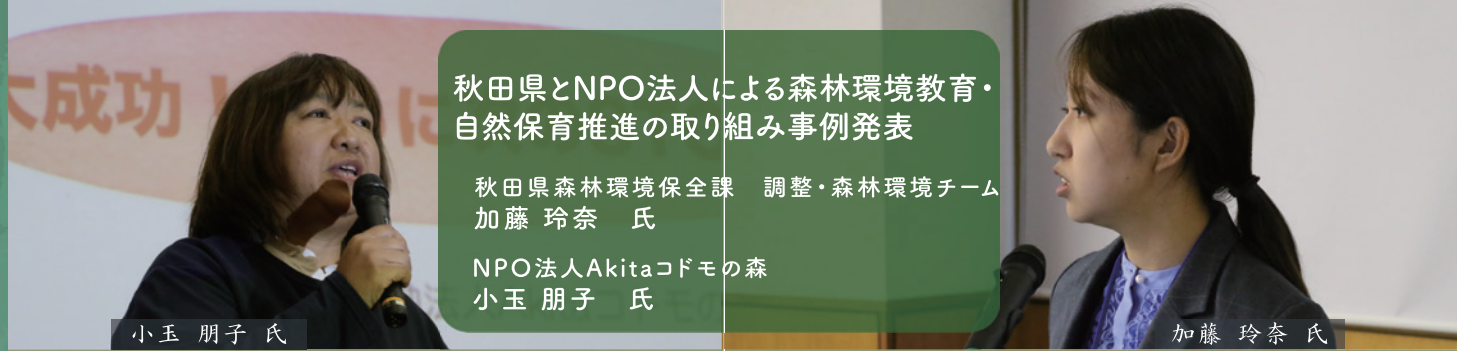
青空保育たけの子 辺見妙子



森で育つ母のチカラ

森のようちえんもりねっこ 山口真由





秋田県とNPO法人による森林環境教育・自然保育推進の取り組み事例発表

秋田県森林環境保全課 調整・森林環境チーム
加藤 玲奈 氏

NPO法人Akitaコドモの森
小玉 朋子 氏

小玉 朋子 氏

加藤 玲奈 氏

秋田県とNPO法人が連携し、森林環境教育と自然保育を広げてきた取り組みと成果が報告されました

本発表では、はじめに秋田県森林環境保全課より、森林環境学習支援に関する制度的枠組みおよび指導者養成事業について報告が行われ、続いてNPO法人Akitaコドモの森より、現場における実践と人材育成の成果について発表がなされた。行政と民間が連携しながら進めてきた、秋田県における自然保育推進の取り組み事例である。

1. 秋田県森林環境保全課による発表 (森林環境学習支援と指導者養成の取り組み)

秋田県森林環境保全課からは、県が進める森林環境学習支援の取り組みについて説明があった。秋田県では、平成20年度より「秋田県水と緑の森づくり税」を創設し、県民共有の財産である森林を守り、次世代へ引き継ぐことを目的とした各種事業を展開している。本税は、個人・法人から広く負担を求め、その財源を活用して、森林整備などのハード事業と、森林環境学習や普及啓発といったソフト事業の両面から森林づくりを推進している。

森林環境学習活動支援事業は、幼稚園・保育所・小中学校等を対象に、森林環境学習、森林・林業体験、木育活動等を支援するものであり、1件あたり50万円を上限とした補助が行われている。こうした事業を効果的に活用するためには、活動を担う指導者の育成が不可欠であるとの認識のもと、秋田県では森林環境教育指導者養成事業を重要な施策として位置づけてきた。

その中心的な取り組みの一つが「森の保育士 野外保育・自然保育推進講座」である。本講座は、全国的に高まりを見せる「森のようちえん」への関心や、幼児期からの森林環境教育の重要性を背景に、平成30年度以降、内容を発展させながら継続的に実施されてきた。講座では、座学に加え、フィールドワークや園児の活動に同行する実践講座を組み合わせ、安全対策も含めた実践的な学びの機会が提供されている。

県の発表では、講座と補助事業が連動することで、保育施設が自然保育に取り組みやすい環境が整いつつあることが示され、今後も継続的な支援を通じてより多くの子どもたちに森の魅力を伝えていく方針が述べられた。

2. NPO法人Akitaコドモの森による発表 (現場実践と人材育成の成果)

続いて、NPO法人Akitaコドモの森から、現場の視点

による自然保育推進の取り組みについて報告が行われた。同法人は、「県内すべての子どもたちに、自然に触れ、自然の中で過ごす体験活動が平等に与えられること」を目標に掲げており、その実現には、日常の保育の中に自然保育が根付くことが不可欠であるとしている。

発表では、秋田県内における課題として、保育士自身の自然体験の不足、保護者の理解に対する不安、管理職層の消極的な姿勢、そして継続的に活動する民間団体の少なさが指摘された。これらの課題を乗り越えるため、同法人は秋田県と連携し、段階的な「森の保育士養成」に取り組んできた。

養成講座の開催（コロナ禍においてはオンライン研修を実施）により、多くの保育士が学ぶ機会を得るとともに、森のようちえん見学会や公開保育研修を通じて、子ども・保護者・保育士の実際の姿を体感する場を提供してきた。その結果、参加した保育士の意識が大きく変化し、自園での実践へとつながったほか、森林環境学習活動支援事業の補助金を活用する保育施設数は、養成講座実施前と比べて約3倍に増加するなど、着実な成果が報告された。

また近年では、本講座が保育士等キャリアアップ研修として認定されたことにより、森林部局に加え、教育関係部局である幼保推進課との連携も進み、保育施設の管理職層からの信頼と理解が得られ始めている。これにより、自然保育推進に向け、秋田県全体が前向きな方向へ動き始めているとの認識が示された。さらに、自然保育の受け入れ側となる森林・林業関係者向け講座の実施など、森林と保育の「川上川下」をつなぐ新たな展開も始まっている。

同法人の役割としては、講座を受講した保育士が自園において自然保育の価値を伝え、現場で実践しやすい環境を整えるため、引き続き管理職層への理解を促す働きかけを担うこと、そして行政と現場が連携した持続可能な自然保育推進の必要性を発信していくことが強調された。

本取り組み発表を通じて、制度設計を担う行政と、実践を担うNPOが、それぞれの立場から成果と課題を共有し、相互補完的な関係の重要性を改めて確認する機会となった。

最後に、森のようちえん全国ネットワーク連盟より、「森林関係分野で制度設計を担う行政と、子どもたちの生きる力を育む実践を担うNPOが連携し、年々実績を積み重ね、さらに教育分野の行政も加わるという形は、全国的にもあまり例がなく非常に意義深い。このような秋田県における取り組みは、今後の森林環境教育・自然保育のモデルとして、他地域への波及も大いに期待される」との講評が述べられ、本発表は締めくくられた。

情報交換会・交流会②



フォーラム2日目の夜は、アスパム1階を会場に交流会が行われました。青森県内のオーガニック食材をふんだんに使ったビュッフェが並び、今回のテーマでもある「食」とつながる時間となりました。参加者同士がそれぞれの実践や思いを語り合い、立場や地域を越えた情報交換と交流が生まれていました。



青森市内の5店舗の飲食店が協働して料理を準備し、会場には地域の豊かさを感じる多彩な料理が並びました。



会場は、ねぶたのお囃子や音楽、食、文化に彩られ、参加者同士の交流がいっそう深まる場となっていました。



会の中盤には、青森ねぶた祭の囃子団体による演奏が行われ、跳人（ハネト）とともに「ラッセラー、ラッセラー」という掛け声が会場に広がりました。この掛け声には、厄や災いを払い、心身を清める意味が込められていると言われています。参加者も太鼓のリズムに身をゆだねながら会場全体が一体となっていました。

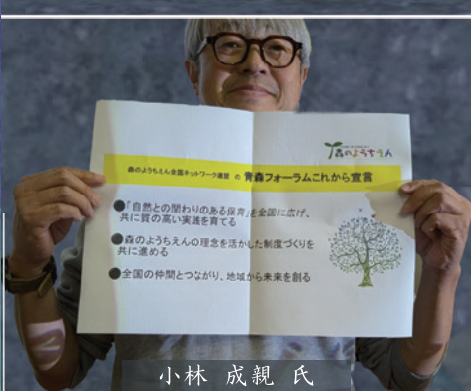


ツジマガク氏による「森のようちえんのうた」では、参加者が自然と手拍子や声を重ね、松下おとじろう氏による紙芝居では、物語の展開に耳を傾けながら、多くの参加者が引き込まれるように見入っていました。



全20回のフォーラムすべてに参加されている沼倉さん（左）と菓谷さん（右）に、実行委員長より感謝を込めて表彰が行われ、青森産りんご1ケースの目録が贈呈されました。

会は21時に閉会し、交流の熱気と余韻を残したまま、フォーラムは3日目の最終日へと進んでいきました。参加者それぞれが、この二日間で得た出会いや学びを胸に、翌日のプログラムへと思いをつないでいきました。



小林 成親 氏

【登壇者】

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟
理事長 小林 成親 氏

【ファシリテーター】

NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟
理事 伊藤 輝 氏

「Mori-Yoチャンネル」



記念シンポジウム②の振り返りは
こちらからもご覧いただけます

記念シンポジウム② 私の森のようちえん宣言

この3日間で得た学びや気づき、つながりを持ち寄り、連盟の「青森フォーラムこれから宣言」と、参加者一人ひとりの「私の森のようちえん宣言」へとつなげる時間となりました。

森のようちえんのこの先や未来、夢を確かめるため、この3日間でそれぞれが得た体験、情報、アイデア、つながり、そしてその時に沸き起こった感情などを集約し、それを連盟の「青森フォーラムこれから宣言」にすると共に、参加者それぞれの「私の森のようちえん宣言」として表明してもらい、今後のアクションに繋げていく機会にしました。

森のようちえんの現在地の確認

1日目のシンポジウムの最後に参加者から「今の活動の強み」「こどもを取り巻く環境における課題」などについてアンケートで回答をもらった結果を生成AIにより「SWOT分析」にまとめました。この分析は現状を「強み、弱み、機会、脅威」の4つの要素に整理して、戦略や改善策を考えるために役立つフレームワークです。そして「NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟」の小林理事長が登壇し、この結果について考察しました。その中で、強み・弱みともに「人材・仕組み」に関するものが多いとの所感がありました。

SWOT 分析



連盟による「青森フォーラムこれから宣言」

そこで、これらの結果を受け「森のようちえん全国ネットワーク連盟」として今後どのように展開していくかを「青森フォーラムこれから宣言」として以下のように発表しました。

①「自然保育」を全国に広げ、共に質の高い実践を育てる

私たちは、「自然保育」を保育園・幼稚園・認定こども園へと広げ、全国の幼児教育の新しいスタンダードを築いていきます。講習会や研修を通じて質の向上を図りながら、「すべての子どもたち」が自然の中で豊かな時間を過ごせる環境づくりを進めていきます。

周囲の園が自然保育を取り入れることで、自園の個性が失われるのではないかと声もあるかもしれませんが。しかし、私たちはその逆だと考えます。理念や実践の違いがより明確になり、それぞれの園の個性がより輝く。そのような未来を信じ、私たちは先頭に立ってこの動きを広げていきます。

②森のようちえんの理念を活かした制度づくりを共に進める

私たちは、認可外保育施設の指導監督基準において、森のようちえんの実態や理念を踏まえた改善を求めます。

特に、園舎を持たない森のようちえんであっても、子どもたちが安全に、そして豊かに過ごせる環境を整えられるよう、制度面での柔軟な対応を提案し、関係者と協働して検討を進めています。

現場の声から制度を変えていく。その先頭に私たちは立ち、共により良い未来を築いていきます。

③全国の仲間とつながり、地域から未来を創る

全国をブロックごとに分け、それぞれに理事を配置しました。

地域の理事は、皆さまの現場の課題や想いに寄り添い、ともに考え、解決への道を探っていきます。

全国の仲間とつながり合い、学び合いながら、地域から自然保育の輪を広げていく。私たちはこの大きなつながりの力を信じ、一步一步、確かな歩みで未来を創っていきます。

また、理事会の再編により、全国の各ブロックに理事を配置したことを紹介しました。

青森フォーラムこれから宣言

全国ブロックごとの理事を配置しました。



北海道東北ブロック
小玉朋子・上田融・伊藤輝之

北海道、青森、岩手、
秋田、宮城、山形、福島

中部ブロック 小林成親・横田聖美
笠倉秀貴・京井麻由

静岡、愛知、岐阜、山梨
長野、新潟、福井、石川、富山

中国四国ブロック
石井千穂

島根、鳥取、岡山、広島、
山口、徳島、香川、愛媛、高知

関東ブロック
沼倉幸子・関山隆一・藁谷久雄

東京、神奈川、千葉、
埼玉、茨城、栃木、群馬

関西ブロック
岡本麻友子・野澤俊索

大阪、兵庫、京都
奈良、和歌山、三重、滋賀

九州沖縄ブロック
中山千春・小倉宏樹

福岡、大分、佐賀、長崎
熊本、宮崎、鹿児島、沖縄

参加者による「私の森のようちえん宣言」とその分析

次に、参加者それぞれの「私の森のようちえん宣言」を考えてもらいました。各自の宣言を名札の裏に明記してもらい、それを写真撮影して指定先へアップロードすると共に、宣言投稿フォームへ投稿してもらいました。そして、全員の「私の森のようちえん宣言」の投稿を集約し、生成AIにより分類しました。主要項目に分類した結果は以下のようになりました。

1. 基本理念・価値宣言

自然との共生と子どもの権利を軸に、幸福・安心・多様性を重視する保育観を示す。
生命の循環と相互ケアの倫理を基盤に据える。

2. 実践・行動宣言

理念を現場に落とし込むための具体行動を明示。
認可園化・発信・体制整備など、継続的な実践と制度的基盤づくりを志向する。

3. 学び・専門性の深化

保育者自身の学びと成長に焦点を当て、自省・言語化・理論化を通して専門性を高める。
経験知と理論知の往還を重視する。

4. 地域・社会への展開

地域資源と連携し、自然保育を公共的価値として拡張する動き。
社会教育・福祉・政策への波及を意識した外向きの実践領域。

5. 子ども・家庭・保護者支援

子どもと保護者の幸福・成長を一体として捉え、親育ちと家庭支援を重視。
感情・感覚の発達を支える温かな関係性を基盤とする。

6. ビジョン・将来構想

5年・10年単位の将来構想として、法人化・馬介在・食育・児童館等の新たなモデルを提示。
持続的発展と次世代継承を目指す。

まとめ

「私の森のようちえん宣言」の分析結果について、小林理事長から感想をもらいました。小林理事長は、参加者の前向きなニュアンスが分類結果に反映されていて、子どもと向き合う上での前向きさを評価しました。また、フォーラム終了後に参加者各自の「帰ってからが勝負」として今後の実践を促すコメントを残しました。

最後に、初日の森田氏の基調講演にあった「社会の未来は皆が抱く予測によってできている」という言葉に触れ、今回の連盟による「青森フォーラムこれから宣言」と参加者による「私の森のようちえん宣言」で出された考えが、まさしく「森のようちえん」の未来形成につながるであろうとまとめてシンポジウム②を閉じました。





特別講演

株式会社今治、夢スポーツ 代表取締役会長
岡田 武史 氏
「エラー＆ラン
正解のない世界を生き抜くには」



岡田武史氏は講演の冒頭で、正解のない時代を生き抜くためには、ただ自由であればよいのではなく、まず物事の「原則」や「本質」をきちんと身につけることが大切であると語りました。自由な発想や創造的な判断は、土台となる考え方があってこそ生まれるものであり、表面的な型ではなく、本質を理解した上で自ら考え、行動していくことが重要である、という考えが示されました。こうした視点は、サッカーの指導にとどまらず、人材育成や教育全般にも通じるものとして語られました。

また、FC今治の経営や学校づくり、地域づくりに取り組む中で、岡田氏が一貫して大切にしてきたのは、理念に基づいて判断することでした。講演では、「次世代のため、ものの豊かさより心の豊かさを大切にする社会づくりに貢献する」という理念が紹介され、目に見える成果や数字だけではなく、信頼、つながり、共感といった目に見えない価値こそが、これからの社会において重要になるのではないかと語られました。経営も教育も地域づくりも、それぞれ別のものとして存在しているのではなく、こうした理念を軸にすべてがつながっているということが、講演全体を通して繰り返し示されていました。

岡田氏はまた、人が成長するためには、本人が自ら「その気になる」ことが欠かせないと強調しました。外側から答えを与えたり、形だけ整えたりしても、本当の意味で人は育たないという考えです。そのため、指導者や大人の役割は、先回りして正解を示すことではなく、本人の中にある思いや意思を引き出し、自分で考え、自分で決めて動けるように支えることにあると述べました。寄り添うことと放任することは異なり、本人の力を信じながらも、必要な場面ではしっかり支える関わりが大切であるという指摘は、教育や育成に関わる多くの参加者にとって印象深いものとなりました。

その文脈の中で語られたのが、「主体性」と「自主性」の違いです。岡田氏は、自主性とは求められたことを自ら進んで行うことであり、主体性とは、自分で目的や方向を考え、自ら始めることであると整理しました。これからの時代に必要なのは後者であり、与えられた役割をきちんとこなすだけではなく、自分は何を目指したいのか、どうありたいのかを問い続けながら動く人を育て

ることが重要であると語りました。学校や組織においても本人の自己決定を大切に、当事者意識を育むことが欠かせないという考え方が示されました。



また、学校は知識を学ぶ場であるだけでなく、社会と
出会う場であるとも述べられました。多様な人と出会
い、異なる価値観に触れ、現実の課題と向き合う中で
こそ、人の学びは深まっていきます。学校の中だけで完
結するのではなく、地域や社会とつながりながら学ぶ
ことによって、自分の学びが現実の世界と結びついて
いることを実感できるようになるという視点は、岡田氏
が進める学校づくりの根底にある考え方として語られました。教育とは、単に知識を教えることではなく、人が社会の中で
どう生きるかを学ぶ営みであるというメッセージが、ここでも明確に示されていました。



自然の中での体験についても、岡田氏は大きな意味を見いだしています。自然の前では、人は自分の都合だけで物事
を進めることができず、自分自身と向き合わざるを得ません。そうした体験を通して、自立や協働のあり方を学び、また自然
や環境を一方的に利用するのではなく、次の世代へどうつないでいくかという視点も育まれていくと語られました。講演
では、便利で快適な社会の中では育ちにくい力があること、また自然の中での体験が人の内側に眠る力を呼び覚ます契
機にもなりうるということが語られ、自然体験と教育との深いつながりが示されました。

さらに岡田氏は、これからの社会では、一人で生きるのではなく、違いを認め合いながら共に生きる力がより重要にな
ると述べました。人はそれぞれ価値観も考え方も異なりますが、それを「間違い」として切り捨てるのではなく、「違い」とし
て受け止め、共通の目的に向けて折り合いを探っていくことが必要だという考えです。チームづくりや組織づくり、地域づく
りにおいても、全員が同じであることを求めるのではなく、違いを持ったまま共に進むことが大切であるという視点は、森
のようちえんの実践とも響き合う内容として受け止められました。

講演の終盤では、資本主義や民主主義の揺らぎ、気候変動、AIの進展など、これまでの延長線上では考えにくい大き
な変化の中で、誰かが正解を示してくれる時代ではなくなっていることが語られました。だからこそ、一人ひとりが自ら考え
、小さくても自分たちで動き出し、支え合いながら新しい価値をつくっていくことが求められていると岡田氏は述べました。
上から与えられる答えを待つのではなく、それぞれの場所で、それぞれの人が理念を持ち、行動し、共助のコミュニティを
育てていくことが、次世代のための社会づくりにつながるというメッセージで講演は結ばれました。

岡田氏の講演は、サッカー、経営、教育、地域づくり、環境といった一見異なる領域を横断しながら、それらがすべて「
次世代のために、心の豊かさを大切にする社会をどうつくるか」という問いのもとでつながっていることを示すものでした
。正解のない時代にあって、原則を大切に、自ら考え、他者と支え合いながら歩んでいくことの意味を、改めて深く考えさ
せられる講演となりました。



外遊びプログラム

フォーラム期間中には、自然学校キッツ森のようちえんの協力のもと、子どもたちが自然のなかで過ごしなが、多様な遊びや暮らしを体験する外遊びプログラムも実施されました。保護者が講演や分科会に参加している間、子どもたちは身近な自然にふれ、仲間と関わり合いなが、それぞれのペースで豊かな時間を重ねていきました。

山ご水キヤンプ
YAMAGOMORI CAMP



体験! 森のようちえん

外遊びプログラムでは、青森大学の庭を舞台にした「体験! 森のようちえん」と、自然のなかで寝食をともにしながら過ごす「YAMAGO-MORI CAMP」が行われました。木の実や落ち葉、水たまりなど身近な自然を遊びへと変えていく体験と、テント設営や飯盒炊飯、キャンプファイヤーなど暮らしをつくる体験の両方を通して、子どもたちは仲間と関わり合いなが豊かな時間を重ねていきました。自然のなかで遊び、暮らし、工夫しながら過ごした三日間には、子どもたちのいきいきとした姿が見られました。

山ご水
キヤンプ



テント設営や野外炊飯、火を囲む時間を通して、自然のなかで暮らす楽しさと工夫にふれました。



体験!
森のようちえん



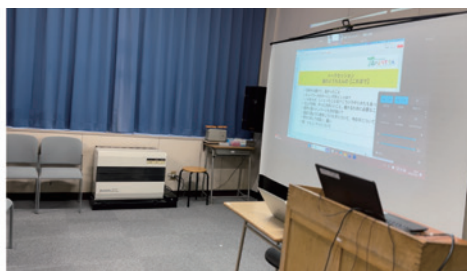
晴れの日も雨の日も、その時々自然を受けとめなが、のびのびと遊ぶ姿が見られました。



親子ルーム



親子ルームは、親子で安心して利用できるスペースとして設けられ、授乳にも対応できる環境が整えられていました。室内にはモニターも備え付けられ、親子ルームで過ごしなが講演の様子を確認することができました。





森のようちえん 閉会式 全国交流フォーラム in 青森 式

閉会式では、3日間のフォーラムを振り返りながら、実行委員長より大会を支えてくださった多くの方々への感謝と、次回大会へ向けた思いが語られました。続いて、次回開催地である長野県から来ている皆さんが壇上に上がり、両県の特産であるりんごを通じてつながる青森と長野の縁と、青森大会の思いを次の長野大会へつないでいくことが示されました。その象徴として、青森フォーラムの佐々木実行委員長と、長野フォーラムの実行委員である工藤淳さんが、腕を絡め合い力強くりんごを食べあう場面も見られました。会場には、次回へとつながっていく前向きな空気が和やかに広がっていました。



最終日の会場には200名を超える人々が集いました。「いのちの根を見つめなおす3日間」をともに過ごした仲間たちは、名残を惜しみながら最後の時間を分かち合っていました。

本フォーラムへご参加いただいた皆様、ご支援ご協力いただいた企業、団体、地域、大学等の皆様、ボランティアの皆様、私たちチーム東北の実行委員と共に本フォーラムを作って下さりありがとうございました。心より感謝申し上げます。



次は長野でお会いしましょう



参加者の声から見てきたこと

参加者アンケートをもとに、AIで整理した内容をQRコードからご覧いただけます。



ご支援・ご協力いただいた皆さま

ここに深い感謝を込めて、ご芳名を掲載いたします。

※敬称略

特別協賛



一般財団法人

セブン-イレブン記念財団

一般財団法人セブン-イレブン記念財団

協賛

mont·bell

株式会社モンベル



ニューウェルブランズ・株式会社青森山田サービス
ジャパン合同会社
コールマン事業部 株式会社サンデー

後援

青森市 青森市教育委員会 青森県私立幼稚園連合会 青森県保育連合会
日本保育協会青森県支部 青森県保育協会 全国認定こども園協会青森県支部

協力



necota studio

ホームページ・グッズ・冊子・イラスト・動画等 制作担当

本フォーラムは、多くの皆さまの温かいご支援とご協力に支えられ
開催することができました。

皆さまのお力添えによって、この節目の年にふさわしい学びと対話の場が
生まれたことに、心より感謝申し上げます。

森のようちえん全国交流フォーラムin青森 実行委員会
実行委員一同

オール東北 根っこわーく

Rooted Together, Moving Forward Together

森のようちえん全国交流フォーラムin青森 実行委員会

実行委員長 佐々木豊志 (青森大学)
副実行委員長 藤公晴 (青森大学)
副実行委員長 小玉朋子 (NPO法人Akitaコドモの森)
事務局長 後藤欣司 (青森大学)

青森県

呉竹幼稚園 蛭ヶ丘幼稚園
齊藤園子 櫻井奈緒子



青森大学

藤原愛佳 布施天歌 池田龍之介 江良来樹 小笠原龍空
楠美圭斗 小枝遥斗 高館海史 土屋道嗣 藤田龍信 松谷琉奏
室岡大河 勝浦皓己 鈴木健龍 田名邊瀬楠 若菅竜作
磯川蓮治 工藤俊輔 渋谷花恋 西村怜夢 深沢口心羽

秋田県

ふたき草 NPO法人Akitaコドモの森
★伊藤弥生 野中素子 土田はるか
櫻井玲子 高橋春美
下山菜穂子 岩崎香奈子



山形 & 福島県

NPO法人青空保育たけの子
★辺見妙子 ★鮫島由紀子
★平田祐登



岩手県

つちのこ保育園 一般社団法人三陸駒舎
★高浜菜奈子 ★泰原豊



宮城県

自然あそび保育モリノネ
★深澤鮎美 ★松田妃菜
自然学校キッツ森のようちえん
★中津範洋 小野俊介
★山城千恵子 菊池輝
くりこま高原自然学校
★塚原俊也 住吉利允



野外自主保育サークルおむすびこりん

★齋藤弥生

空の下のようちえんどんぐりこ

★尾崎あす香 ★阿部梢

柴田有美

社会福祉法人想伝舎 食と森のこども園美里

★鈴木聡子 赤間かえで

小林里桜 藤森千奈

一般社団法人のらてく わだつみ保育園

高橋朝子 山口さくら 戸井香織 佐々木志央里

社会福祉法人永遊舎 幼保連携型認定こども園 やまつみ

★津田勇健 津田舞 齋藤愛貴

株式会社えがおのはなさくカンパニー えがおのはなさくみんなのほいくえん

★菅原尚孝

necota-Studio ★工藤純子

★佐藤賢

※順不同 敬称略
★は実行委員

NPO法人 森のようちえん全国ネットワーク連盟

小林成親 沼倉幸子 岡本麻友子
藁谷久雄 石井千穂 伊藤輝之
上田融 小倉宏樹 笠倉秀貴
京井麻由 小玉朋子 関山隆一
横田聖美 中山千春 野沢俊豪
中能孝則 小松紀子